

## フランス郵船と日本

—— 1865年から1889年までの横浜寄港から ——

澤 護

本稿はフランス郵船が初めて日本に寄港した1865年から1889年までの動向を調べ、25年間に渡る同社所属の郵船名や横浜の入出港を記録し、そこからフランス郵船がどう日本と関わったのか、またこの郵船を利用した人たちにはどのような人物がいたのか、輸出品目はどんな物があったのかを記述しようとするものである。

横浜入出港に関しては、全て当時の記録に当たったが、一部不明のまま残された箇所もある。また、乗船客の氏名を全て網羅するのには、あまりにも多くの紙幅をとるために、貿易関係の記録と共に、かなり多くの部分は見送らざるを得ないことを付記しておく。

### フランス郵船の沿革

フランス郵船会社の前身は「総合運輸会社」と称し、パリのノートル＝ダム・デ・ビクトワール通りに設立され、フランス全土に駅馬車を走らせていた陸運会社であった。しかし、1832年にリヨン——サン・テチエンヌ間、1837年にパリ——サン・ジェルマン間に初めて鉄道が開通されたことにより、この新しい輸送手段は馬車を圧迫していった。

総合運輸会社は、初めのうちこそこの鉄道という新しい競走相手と激しく戦い、フランスのどんな辺鄙な片田舎にも馬車を走らせ、さらにソーヌ河に蒸気船を浮かべたりして抵抗したが、この努力が無駄であることを悟

った。

1850年には鉄道が主要幹線道路網を完全に制覇するであろうと予測した運輸会社は、会社の生き延びる道を模索しながら、ひとつの結論に達した。鉄道が開設されることがない場所、つまり海の開拓ということであった。しかも、これからの海は帆ではなく、蒸気力を利用する必要性のあることを認識していたが、この帆からスクリューへ、陸から海への一大転換が後にこの会社を世界有数の船会社に導くことになった。

丁度この時期、フランスの海運は長い不振期から抜けだす時にあった。また、アルジェリアを占領したあと、フランス政府はフランスとアフリカとの交通・通信網の確立に躍起になっていた。1832年には、マルセイユと地中海各地とを結ぶ航路が開設され、政府の手で郵便物の輸送も実施されるようになっていた。しかし、この郵便輸送は財政的には破綻を来していたため、陸を捨て海を目ざしていた運輸会社は渡りに船とばかりに政府に背替りを申しで、地中海航路の郵船の就航に努めた。

こうして郵便物の海上輸送を独占することとなった運輸会社は政府と契約を結び、1851年8月6日に「国立運輸海運会社」(Compagnie des Services Maritimes des Messageries Nationales)を誕生させた。この会社は、第二帝政期に「帝国郵船」(Messageries Impariales)と改称され、1870年の共和制の時より「郵船会社」(Messageries Maritimes、以下フランス郵船と略す)とさらに名称の変更がなされ、今日に至っている。

フランス郵船の日本寄港の最初の船は、アレテューズ(Arethuse)号で1863年のことであったが、定期船は1865年まで待たなければならない。日本に関わる東洋航路の変遷を示すと、大まかに次の年に開設されている

- ・1862年10月 スエズ・香港間
- ・1863年 2月 上海・香港間
- ・1865年 9月 上海・横浜間
- ・1869年 3月 香港・横浜間

- ・1870年 4月 マルセイユ・香港間
- ・1871年 8月 マルセイユ・上海間
- ・1887年 8月 マルセイユ・横浜間

1865年以降における各郵船の動向と乗船客については、各年度の項で記録することにするが、もとより全てを網羅できるわけではない。1865年の日本への寄港より1889年までの25年間の記録にとどめたが、それ以降の調査もしてある。

フランス郵船に限らず、イギリス、アメリカ、ドイツの船舶や、東洋航路ばかりでなく太平洋航路便も各年度とも可能な限りの資料集めは終わっているので、この有効な活用を考慮している。

なお、フランス郵船についてはすでに記事にしたこともあるので、<sup>1)</sup>その方も併読してもらいたい。

入出港の日時を細かく調べてみると、若干の時刻のずれ、あるいは1日の差が新聞各紙を付き合せてみると稀に生じている。また、新聞等の記録と当該郵船を利用した旅人の日記とでは、よく食い違いがある。これは次のような時にみられる。

時期によっても異なるが、フランス郵船は日の出と共の早朝出航がよくあった。そのような便を利用する場合は、前日の夕刻の乗船であったから、ここから生まれる日記等との誤差がみられることになる。また、夜半の入港であれば、下船は翌日の早朝となった。したがって、1月1日の深夜に船が入港したが、2日の下船となり、日記では2日午前7時横浜の土を踏むなどとなったりもする。

日記はその人物を知る基本資料となるが、日本人のものは往々にして陽歴と陰歴とが入り混じっているもの、日付変更線に気がつかずに記録しているものなどがあるだけに、分析には大いに注意をする必要がある。

## フランス郵船の横浜入出港

1865

1864年6月2日の協定により、それまで予定されていたフランス郵船のサイゴン・マニラ間の支線の開設は破棄され、代って上海・横浜間の開設が決定された。これは、2代目在日フランス公使のレオン・ロッシュが、フランス郵船を上海より横浜まで延長し、日本の蚕種の輸送を考えついたからに他ならない。

同日の協定には、フランス政府とフランス郵船との間で郵便物の輸送もすることが含まれており、郵便輸送がこの航路の大きな目的となった。当時、日本には未だ郵便制度はなく、1871年に日本が郵便創業を開始した後も、この航路は完全にフランスの手に握られており、1880年になるまでフランスに牛耳られていた。

当初、上海・横浜間の支線は1866年1月より実施されるはずであったが、極東向けに配船されたデュプレックス号が1865年8月20日に香港に入港したこともあって、この年の9月より上海・横浜間に就航することになった。1864年6月の達によれば、この航路の運行は毎月5日に上海を出港し10日の横浜入港、復路は横浜を13日の出港で18日の上海入港を予定していた。

フランス郵船の寄港は、1865年8月19日付の広告で一般に知らされたが、この広告によれば、「1864年6月2日のフランス政府とフランス郵船との協定により、来る9月初旬に上海・横浜間の定期郵船の業務が実施される。この航路は、デュプレックス号（280馬力、1900排水トン）、船長メリザン海軍大尉があたる。上海より横浜への出航は、ヨーロッパ便の到着後およそ24時間である。横浜より上海への出港は毎月13日で、上海でヨーロッパ行きの便と接続する。乗船料金や運賃はいずれ公示する。<sup>2)</sup>」という内容のものであった。

しかし、現実には北東の季節風が吹く10月から4月までの間と、南西の季節風の吹く5月から9月までの間では、幹線のスエズ・香港間では誤差がでることもあって、実際の運行は表で記載したように予定通りにはいっていないことが多い。

フランス郵船の横浜事務所は初め居留地1番のジャーデン・マセソン商会（英一番館）内に設置され、その任はホープというイギリス人があたった。ホープは居留地で最も人望の高い、しかも最大の資本家で、英一番館の館主であったから、フランス郵船の責任者が来日し、その任に付くまでの間、特にフランス側が依頼したものであった。

英一番館のホープの事務所に一時的に設けられたフランス郵船横浜支店は、早くから独自の店を持つことを心懸けながらも1867年1月になるまでこの場所にとどまった。

1865年9月7日に初めて横浜入港をはたしたデュプレックス号は、<sup>3)</sup>9月12日にはもう復路についた。この時の乗客には明治13年まで日本に滞在したムーリエ博士の妻と2人の子供、横浜ゲーテ座の創設者のN. ヘフトらがいた他、絹118梱、蚕種687ケース、雑貨・美術品36梱が積み込まれた。<sup>4)</sup>

当時の新聞記事はデュプレックス号の横浜入出港を歓迎して報じ、特に蚕種の輸送では、ライバルのイギリス郵船がそれ相応の蚕種の保存室を設ける必要性は避けられまいとしている。<sup>5)</sup>

この復路の第1便に乗船し、上海、香港、アレキサンドリアで乗り換えてフランスに向ったとすれば、9月12日の横浜出港から50日目にあたる11月2日にマルセイユに着くことができた。この第1便の航海についてはすでに発表してあるので、<sup>6)</sup>ここでは重複を避ける。

フランス郵船の第2便の横浜入港は1865年10月15日朝のことだが、初めの予定は10月10日で、次で10月13日入港と報じられていた。この遅れは幹線航路のガルから香港までの行程がほぼ悪天候だったためだが、この

本便の到着を待って接続して出港することになる支線の便には、当然のごとく遅延となって表われる。

このような遅れは、居留地社会では大きな影響となって生じることになる。例えば、横浜にあったフランス郵便局やイギリス局は、配達する制度を取り入れてなかったので、故郷から届く郵便物の受け取りに大勢の人たちが集まる。また、本国から送られてくる新聞や雑誌の中から、いち早く目新しい記事をみつけ、自分たちの発行する新聞に記事を掲載した新聞人たちは、その発行時間を延ばしたりもしたからである。

こういった面ばかりでなく、郵船会社にとっても死活問題だったのである。この第2便の到着が遅れたため、当初フランス郵船に積み込まれるはずだったヨーロッパ向けの蚕種は、その大部分がイギリス郵船で運ばれるといったことも生じた。10月18日出港したデュプレックス号の積荷は絹76梱、蚕種658ケースであったが、やはり18日に出港した英船のグラナダ(Granada 561トン)号は、早くからこの日の出港を公示していたために、絹507梱(内、339梱はマルセイユ向け)、蚕種1,122ケースの積荷となり、横浜港始まって以来の最高の積載量となったのだった。<sup>7)</sup>

郵船の入出港は最大の関心事で、特に絹商人は船が出港する前の10日間ほどは多忙を極めた。そして、一度船が港を出てしまうと、次の船が来るまでは暇となり、ボート、射撃、音楽、ボーリング、演劇などに娯楽を求めたのであった。したがって、横浜があらゆる事柄の魁、つまりものの始めとなったのも大いにうなずける。

この年の人物往来はあまり目立ったものはないが、フランス郵船の支配人となるプーエイ(Hte. du Pouey)が12月16日の便で来日し、翌年の1月1日よりその任にあたった。なお、プーエイは1866年12月まで同社の責任者であった。

1865年中に、デュプレックス号が横浜より積んだ荷は、絹699梱、ぼろ絹232梱、蚕種1,832ケース、繭243梱、海草181梱、雑貨類218梱であ

った。1862年から1865年にかけての各国向けの輸出品目の中心は絹であったが、この絹はイギリスとフランス向けで、アメリカへの輸出は英仏の100分の1の量でしかなかった。次で、お茶の輸出が大きな高で、これはイギリスとアメリカ向けで、特に1865年以降のアメリカへの輸出は急激な伸びを示した。

## 1866

フランス郵船の横浜事務所は、この年の1月19日より居留地81番の旧ピッケの家屋に移転したが、さらに5月15日には居留地10番（現在のホテル・ニュー・グランドのある附近）に移り、以後長い間ここが同社の本拠となった。古い記録にあるフランス波止場前とは、この場所を指す。

この年度におけるフランス向けの輸出品は絹関係が極めて大きな比率を示したのはもちろんであるが、1月18日の便では10万キログラムの銅貨錢、次便の2月16日出港の便でも5万キロの銅貨錢に積み込まれている。この時期、他国の船でもかなりの量の銅貨錢が持ち出されているが、これなど上海や香港での交換レート<sup>8)</sup>の比率になんらかの事態が持ち上っていたのかも知れない。

3月12日着の便で、横須賀製鉄所の土木・建築を担当するレノウ、デュモン、バスチャンが来日し、訪仏中の柴田日向守剛中一行10名が同船していた。

4月12日着の便で、バーチ（Birch）夫妻が来日した。オランダ人・ヘフトが横浜居留地68番に劇場の設備をもった倉庫（ゲーテ座の前身）を建てたが、夫妻はそこの最初の出演者で、この4月30日に「休暇旅行——またはヨーロッパの旅」と題するジオラマ演芸を出し物とした。<sup>8)</sup>夫妻はその後1回の催物を演じたあとの6月7日に太平洋を渡った。

4月17日発の便では、横浜フランス領事P. シュブレイ・ラモーがマルセイユに向けて出国している。

5月12日発の積荷にきのこ130梱、海草932梱、鮑6梱とあるが、以降きのこや鮑の輸出がかなり目につくようになる。

10月13日にデュプレックス号に代って、ラ・ブールドンネ号が来港したが、この復路の10月17日の便には、幕末に公使レオン・ロッシュの片腕ともなって暗躍したメルメ・カション（神父）の乗船がみられた。なお、同船には絹916梱、蚕種1,516ケースとかなりの量の積荷の他に、楽器と馬2頭が運ばれた。<sup>9)</sup>

11月18日発のデュプレックス号は上海からそのまま香港に向い、さらにスエズへ向った。これは同船の船体修理のためだったので、横浜への寄港は1868年10月までなかった。なお、同便にはド・ロトルー (De Rotrou) なる人物が乗船しているが、横浜製鉄所首長で記録にあるドロートルと同一人物かと思われる。また、同乗のF. C. クリッペ (Clipet) はフランス人技師で、ロッシュ公使の命を受けて1865年に「横浜絵図面」(横浜開港資料館蔵)を作成した人物であろうか。さらに、遣露使節小出大和守一行が同船した。

この郵船の積荷は絹1,340梱、蚕種1,174ケースの他に、変ったところでは武器28梱、百合球根42梱、通貨66,500ドルという大金もあった。<sup>10)</sup>

12月13日の朝に予定より1日遅れて入港したアルフェー号は、香港より上海を経由して来日した船だが、上海・横浜間を3日と20時間というスピードで航行してきた。この時期の上海・横浜航路の所要日数は5日が予定されていた。この便での来日には、ジュリアス・スタール米領事、3代目のフランス郵船の横浜支配人となるヴァサール (Vasseur) がいる。「万国新聞紙」の広告には、フランス郵船のそれがほぼ毎号にわたって掲載され、支配人・ワッスルとあるが、この人物がそうである。

7月から9月にかけては資料不足のため調査ができていないので、表の日付は訂正があるものと考えられる。



1867

1月13日のアルフェー号で、シャノワーズ以下15名の第1次陸軍フランス教師団が来日した。これらの陸軍教師団は幕府の崩壊のため、五稜郭に残った数名を除いては翌年の10月には帰国してしまうことになる。

1月17日発の便でプーエイが横浜を去り、前日の16日より彼に代ってヴァサールがフランス郵船の横浜での支配人となった。しかし、彼はこの年の8月14日よりアンドレ・コニールにその任を渡すことになるので、プーエイの不在中とコニールの赴任までの間の代理支配人だった可能性が強い。なお、この便には和紙4梱、銀7,400キロ、薬83梱、通貨8,300ドルが積み込まれている。<sup>11)</sup>

2月15日の便では、徳川昭武一行がフランスのパリ万博に列席のため乗船したが、レオン・デュリー、シーボルト、クーレーらも同船した。このアルフェー号は上海を経由して香港まで直行したが、これを最後に日本に寄港することはなかった。同号はこの9月に香港を出港すると、喜望峰を回ってマルセイユに帰港することになるからでもある。

3月16日出港のスオナダ号(1,802トン)は、アメリカ船でフランス郵船所属の船ではなかったが、香港で接続するティーグル号に合せて横浜を出港したのであった。フランス郵船のスオナダ号のチャーター便は、この1往復で終わった。なお、同船には1860年11月5日に来日し、1868年に兵庫にカトリック教会を建てるムーニク神父(P. Mounicou)の名がみられる。

前年と同様に、この年も横須賀製鉄所雇いのフランス人の往来があるが、これらフランス人技師の来日等についてはすでに発表してあるので、<sup>12)</sup>この面に関しては省略する。

この年の積荷としては、7月14日の便できのこ291梱、海老27梱、鮑11ケースに混じって、鹿の角2梱という変った品目があった。また、6月13日の便では、通貨50万ドルという莫大な金額が運ばれている。

1867年5月29日に入港したフランス艦クルーズ（Creuse）号では、ナポレオンより徳川慶喜への贈物としてアラブ馬20頭が運搬されてきた。<sup>13)</sup> 馬の歴史の上では重要な事柄であるだけに、フランス郵船とは関わりのないことだが書き留めておく。なお、同船はサイゴンよりの直行便であったが、この船に第1次陸軍派遣団の追加要員として来日し、箱館戦争に参加した馬術教師カズヌーフが乗船していたものと予測される。

## 1868

1月15日入港のファーズ号で「6名の日本人」<sup>14)</sup>が帰国した。この6名の日本人名の記載はないが、1867年のパリ万博に清水卯三郎が送った三人の芸者（佐登，寿美，加弥）と手代の三人（兼吉，熊吉，善八）であったと判断される。この面の裏付けは、稿を直めて発表したい。

3月18日着の便では、これもパリ万博に派遣されていた向山隼人正一行が帰国した。

6月7日着の便では、3代目にあたる特命全権公使マキシム・ウートレーが夫人同伴で来日した他、フランス公使館付きのド・モンテベロー（de Momtebello）伯，ド・ベアルン（de Béarn）伯も同船していた。さらに、横浜では蘭八商会の名で親しまれたヘクト・リリアンタールの責任者となるガイゼンナイメル（Geisenheimer）もこの船で来日したが、彼は後に富岡製糸場と関わるようになる。このヘクト・リリアンタール商会は、フランスに絹を輸出する最も大手の商会であった。

8月8日の便には、横浜フランス病院の医師となるプギー（Pouigny），横須賀製鉄所副首長のチボーディエ，ペレグランら大勢のフランス人に混じって、83名もの日本人が乗船していた。<sup>15)</sup> これら日本人の数からみて、活字のミスではなかったかと思われる。幕府が倒れた後、イギリス，フランス，オランダから帰国を命じられ，マルセイユで乗船した日本人留学生は23名だったはずだからである。

10月12日に久しぶりにデュプレックス号が寄港したが、この復路の便で第1次フランス陸軍派遣団メンバーのうち、デシャルム、ヴァレットら8名が帰国の途についた。なお、この船には3,020ケースの蚕種が積み込まれたが、この内の1,355ケースはジェノヴァ宛であった。イタリアでも蚕の孵化に努力をしだした時である。

12月16日に幹線用の大型船アンペラトリス号が入港した。本来なれば、この船は香港でファーズ号に接続するはずであったが、ファーズ号の故障に遇って、上海を経由して横浜まで運航されてきた。この船では、フランス留学でパリに留まるはずであった徳川昭武が帰国した。

復路のアンペラトリス号は、上海、香港を経てスエズまで運航されたが、同船の日本寄港はこれ1回のみであった。

話しは前後するが、6月27日にスエズを出航したアンペラトリス号には、フランスの科学観測団が乗船していた。これは8月18日に始まるシャムでの皆既食を観測するためのもので、一行は7月19日にシンガポールで下船した。天文学や星学を本格的に学ぶため、寺尾壽がパリ留学をしたのは1879年のことであったから、ずいぶんと差がある。

なお、この年の8月26日にフランスのパーク船がル・アーブルより入港したが、この船にアレクサンドルという人物がいる。<sup>18)</sup>これは後に松江藩と関わりを持ち、東京で歯科を開業するようになるアレクサンドル(Bélisaire Alexandre)と判断して間違いがない。特に付記しておきたい。

## 1869

この1月よりスエズ・香港間の運行日数は30日と16時間となり、28日に1度の運行となり、これに接続する香港・上海間は3日と13時間となった。

さらに、同年3月より上海・横浜間に代って、香港・横浜間が開設された。つまり、横浜から乗船した旅行者であれば、上海での乗り換えがなくな

なったことになる。香港・横浜間も28日に1度の運航で、片道7日の行程が予定された。この香港よりの直行便は、3月13日に入港したデュプレックス号が第1便となる。

この年度の輸出品では特に変わったものはみられないが、人物往来としては5月12日発の便にヴェルニー夫妻とプティジャン神父が乗船、12月26日発の便で箱館戦争に加わったカズヌーフがサイゴンへ、横須賀製鉄所のメラング夫妻と日本人ミホリ コーヅケ、マエダ コハンがマルセイユに向け出発している。後者の人物は前田弘庵（後の正名）であろうか。

来日としては、松江と関係を持つヴァレットの再来日がある（7月28日着）。

この年、箱館戦争で榎本軍に加担したフランス人の処遇が大きな外交問題となったが、北海道共和国を目指したブルユネ大尉らは、明治新政府の圧力や困惑をよそに、6月19日にフランスの軍用艦デュプレックス号でサイゴンに脱出している。この時の記録には、「ブルユネと彼の僚友7人の士官」とある。<sup>17)</sup>

## 1870

この年のスエズ運河の開通により、従来のスエズ・香港間の幹線を、4月よりマルセイユ・香港間とし、アレキサンドリアでの乗り換えを廃止した。スエズ運河を最初に通過したのはフランス郵船のウーグリー号だったが、この船は3月11日にマルセイユに到着したので、このスエズ開通の第1船に乗船するのであれば、1月22日に横浜を発つデュプレックス号に乗ればよかった。

この年フランスでは共和政府の樹立より、これまでのフランス郵船の社名「メサジュリ・アンペリアル」は、「メサジュリ・マリティーム」と改称されることになった。なお、日本人留学生がかなり大勢フランスに赴いた年だが、この年度の乗船を示す名簿類がみつかっていない。

前年度より28日に1度の運航となったが、この年の7月より12月にかけて1ヵ月に2度の寄港となっている。この理由は明らかでないが、月に2度の運航、つまり14日に1度の運航が完全に実施されるようになったのは、1871年7月よりであった。表で示した入出港の記録は、当時の運行表を主として利用し、別の資料による裏付けができていない個所が多いので、日にちに関しては若干の誤差があるものと予想される。

## 1871

4月16日のヴォルガ号で開成学校教授だった入江文郎らがフランスへ派遣されたとみなされるが、この時の船客名簿に日本人氏名はない。

5月6日着の便で、横須賀製鉄所雇いとなるフランス人に混じって、イワシタとオヤマの2人の日本人が帰国している。

日本人の入出国の記録は意外に少なく、9月12日の便でイナガキ、10月29日の便でヨネザワ、トタローの2人がマルセイユに向け出国している。これら5人の日本人はどのような人物なのか見当もつかないが、明治4・5年頃にパリで兵学や化学を学んだ岩下長十郎、大山岩（巖）、稲垣喜多造らと一致するものか。

12月19日着の便で、富岡製糸場首長のポール・ブリュナがフランス人技師2名と女工4名を伴って再来日した。

この年度の輸出品も絹が中心だが、10月29日発のヴォルガ号の積荷、蚕種2,563ケース、絹400梱などが目につく。この頃の輸出入の詳細な記録は「英領事報告」<sup>18)</sup>で知ることができるので、各年度の記録を比較すれば非常に興味ある事柄をひき出せる。

## 1872

2月6日の便で、横須賀製鉄所医師サヴァティエが10ヵ月の静養休暇を赦され、妻と娘を伴って一時帰国した。なお、彼の再来日は翌年の1月

26日となる。

3月6日の便で、蜂須賀茂韶ら皇族および随行員大勢の日本人がフランスへ出発。

3月24日着の便で、生野銀山で働く6人のフランス人の来日。

5月17日着の便で、マルクリーら第2次フランス陸軍教師団16名の来日と、この年お雇いフランス人の動向が船の上からかなり目立つ。本研究論集23号で、官雇いのフランス人の来日・帰国日に関しては掲載しておいたので、本稿ではこれらの人物についてはほとんど記載していない。

6月27日のヴォルガ号で、メール・マチルド、ノルベール、グレゴワール、ジェラーズの4人の修道女が来日した。マチルドは教育・福祉事業に尽くし、97歳もの高齢で他界した人だが、現在の雙葉学園の創設者でもある。なお、サン・モール関係の記録では、彼女たちの来日は6月28日とある。この1日のズレは稀に起こることかも知れない。つまり、このヴォルガ号の横浜入港は6月27日の深夜であったため、下船は翌28日の早朝になったような場合である。沖合のヴォルガ号からランチに乗って横浜埠頭に上陸したのは6月28日の午前5時頃だったはずで、正確を期すのであれば27日の来日で、28日の横浜上陸ということになる。

表でみると、8月14日着のゴダヴェリー号と、8月19日着の日にちがかなり接近している。このような例は他にもあるが、たいていの場合は幹線航路に問題があったと判断してよい。この例であれば、6月23日にマルセイユより出航したドナイ号は、スエズ運河で故障し、予定より9日も遅れた7月9日にスエズを発った。これに接続する香港からの便が、ドナイ号の到着を待っていたために遅延となって、次便との日にちが接近することになる。

この年のフランスに向った日本人には、4月16日の便で、クマガイ、カマツ（Kamatz）がいたが、フランス留学の熊谷直孝と河津祐之の2名であろうか。また、10月16日の便には、大勢の日本人が乗船した。これらの中

には、東本願寺法主・現如上人一行の5名、ヨーロッパへ法律調査に赴く井上毅、後の大警視となる川路利良、沼間守一、名村泰蔵らの名前がみられる。現如上人に同行した成島柳北（後の朝野新聞社主）は、後に『航西日乗』を刊行するので、この旅行記は非常に参考になる。

## 1873

前年12月26日に入港したファーズ号は、ヨーロッパからの郵便物を積んできた定期郵船だったが、同号の復路の便はない。

ファーズ号は日本政府にチャーターされ、名古屋の金鯢、鎌倉大仏の張抜、高さ2間もある谷中天王寺五重塔の雛形を目玉とするウィーン万博への日本政府出品物2,300梱を積んで<sup>19)</sup>、1月30日に横浜を抜錨してトリエステに向かうからである。したがって、1873年の運航表からはこの便は除外してある。なお、同船にはウィーン万博に関わる書記官や随行員が大勢乗船したが、佐野常民副総裁、シーボルト、ワグナーらはこれとは別に英船にて横浜を後にした。

6月8日着のニール号は初来日の郵船で、この便はマルセイユからの直行便であった。船の点からは特に変わった面はないが、10月から4月にかけての横浜出港は火曜日、5月から9月にかけては水曜日と一応の原則は守られている。

この年度におけるフランス郵船の日本人利用者は、ウィーン万博関係者を除くと、乗船名簿からはあまりみあたらない。それでも気になる名前を拾いだしてみる。

1月21日発の便で、ワタナベ夫妻とツルがマルセイユに向け出国。

2月4日発の便で、ウィーン万博関係者の緒方惟直、佐々木長淳、ナルシマ、ナカブタの出発があるが、彼らはポート・サイドで下船した。

2月10日着の便で、ユリ、イルニ、ハルキチの帰国があるが、由利公正であらう。

2月18日発の便で、H.E.カサムラ、サカイ、ナカイ、カンベ、シカワ、カカバタケがマルセイユに向って出国しているが、海軍省関係ではなかったかと思われる。また、同船でポート・サイドまで行った日本人は、和田收藏、朝日 升、服部杏圃、鼠屋伝吉、カケムラ、ナカハラ、カシワギ、ツチバシがいる。

3月12日帰国の便で10名の日本人とあるが氏名の記載はない。

3月23日の便で、ニシムラ、タナカ、ワシムラ、マキシマが帰国。

4月1日の便で地図関係を学ぶ岩橋教章がウィーンへ、イトー トシがマルセイユに出発。

4月5日着にはシオダとミチケという日本人らしい名がある。

5月25日着の便で、イキタ、オクボ、ニロ ニシカラが帰国。

7月24日着の便で、ゴトー、モリ、キンブ、クロカ、マトモト、ヤマト、イチドが帰国。

8月22日着の便で、ヤマトヤと13名の日本人士官が帰国。他便で若干の日本人と思われる人の乗船があるが、解明できない。

1873年度の横浜からの絹の輸出量は9,448梱で、イギリス宛が4,890梱、フランス宛が3,625であったから、その大部分はヨーロッパ宛であることがわかる。この内、イギリス郵船が5,389、フランス郵船が4,026梱を運んでいる。なお、この年度に、横浜でフランス宛に絹を扱った商社としては、ヘクト・リリアンタールの576、バビエル商会の449、ラウド商会の311、ボルミダ商会の264、ジャクモ商会の222、シーベル・ブレンワルド商会の215、アベグ商会の162、ニーフラー商会の174梱などが大手であった。<sup>20)</sup> 参考までに記録すると、1871年度は10,598梱、1872年度は8,864梱の絹の輸出高であった。<sup>21)</sup>

6月13日入港したヴォルガ号の復路の便は、かなり遅れた9月10日の出港であったが、たぶん横須賀造船所での船体修理があったものと推察される。



1874

この年フランス郵船では大変な惨事がもち上がった。3月13日に香港を出港したニール号は3月22日に横浜入港の予定であったが、前日の21日に伊豆沖で遭難し90名もの犠牲者をだした海難事故である。この船には日本人船客としフランスへ京都・西陣より留学していた吉田忠七がいたこと、ウィーン万博の政府出品物が積み込まれていたことなどから大きな話題となった。<sup>22)</sup>

他に船関係としては、7月30日の米船ネバダ号のチャーター便がある。これは7月28日に入港したヴォルガ号が予定の倍もの日数を費やした航海だったために、復路の足を失うことになったフランス郵船が特にP.M.に依頼したものであった。途中の7月18日に北北東の強風にあおられ、さらに7月23・24日に台風に遭遇したヴォルガ号は船体を壊わし、約2ヵ月ドッグ入りをするようになった。

前年の項に日本人の往来を少し詳しく記載したが、この年度もこの程度の日本人氏名を拾いだすことはできる。ただ、これらの人達がどのような人物であったのか見当がつかず、また他の書物にある来日や帰国日と船客とを対比してみても好結果が得られなかった。

1875

1月12日のヴォルガ号でE. キヨソネが来日した。彼は印刷局に雇われ、凸版技術を教え紙幣や印紙等の印刷に大きく貢献した。

3月30日発の便で4代目のフランス特命全権公使であったG. ベルトミーがフランスへ帰国した。なお、彼の来日は1873年6月23日着のメンザレー号でであった。

4月21日の便で、ロシアで開かれる国際電信会議に出席するため、工部省電信権頭・石井忠亮が出国したが、同行者に塩田三郎、尾崎逸足らがい

た。塩田は最も早くからフランス語を学んだ人物で、文久3年（1863）の遣仏使節池田筑後守一行の通訳として、弱冠19歳の時に渡仏している。

8月25日発の便で、7名の日本人法学生がパリ法学校に留学するため出国と新聞記事の中にある。<sup>23)</sup> これら7名の法学生とは、南校から明法寮に転学し、司法省に出願した木下広次、栗塚省吾、熊野敏三、磯辺四郎、井上正一、岡村誠一に間違いのないものと思われるが、もう1人が不明で、乗客名簿ではシゲシタとある。<sup>24)</sup>

7月18日に、フランスのエコール・サントラルに入学し、後に工科大学長となって近代土木工学の先駆となった古市公威が、太平洋航路で海を渡った。フランスへの留学生が全てフランス郵船を利用したとは限らないので、フランス船ばかりでなく、イギリス船やアメリカ船も調査しなければならない、そのためにも郵船記録はもっと活用されなければならないはずである。

船の運航面からみると、11月23日のヴォルガ号、11月26日のメンザレー号と続けて横浜を出港している。後発のメンザレー号には郵便物の積み込みがないので突然の出港と判断できるが、この理由は明らかではない。

## 1876

この年、先に横浜に入港した郵船が、後に入港した船より遅れて出港している個所が表でみられるが、これは再三にわたって述べたようにミスではない。

この年度の人物往来はあまり目立った動きはないが、1月18日発の便で医師であり植物学者でもあったサヴァチェ夫妻と2人の子供が帰国した。2月15日の便でポール・ブリュナ夫妻の帰国がある。

2月24日発のアメリカ郵船・ペキン号で太平洋を横断し、さらにアメリカから大西洋を渡って欧州へ赴いた一行に、徳川昭武、土屋拳直（昭武の兄、旧土浦藩主）、西郷従道、南部信方、日高次郎、久保弘道、村田正孝が

いた。他に8名の3等日本人船客が同船しているが、彼らの随行者であろうか。明治10年頃ともなると、横浜からパリへは米国経由の旅行者はかなり多くなり、所要日数もほぼ同じぐらいであった。

7月6日着の船でジュール・ジュスランの来日がみられるが、彼については1879年の項で触れることになる。

1877

3月31日着の便で新任のフランス領事アンリ・ピエレ(Henri Pierret)が妻を伴って来日。

4月27日着の便でフランス公使ド・ジオフロワ(de Geoffroy)が妻と子供2人と共に来日。

6月13日発の便で徳川家達がイギリス留学へ出発。同船の日本人にタカムラ, ヤマモト, H. カワダ, N. オークボがいる。

7月16日の便で川島忠之助が帰国。彼はイタリアに日本の蚕種は悪いとの評判を直すために派遣されたが、この旅行が契機となり後のベスト・セラー『八十日間世界一周』を原典訳し、フランス文学の最初の翻訳者として名を残すことになった。10月9日発の便で前田正名、ぶどう酒醸造法を学ぶため派遣された土屋助次郎と高野正誠が出国。

11月20日発の便でレオン・デュリー夫妻が帰国の途についたが、彼の強い勧めがあって京都府から留学を命ぜられた8名の若者を引き連れている。この留学生とは、いずれ名をなす人達で近藤徳太郎、歌原重三郎、今西直次郎、中西米三郎、佐藤友太郎、横田万寿之助、横田重一、稲畑勝太郎の8名であったが、どのようなわけか乗客名簿に稲畑の名はなく、<sup>25)</sup>他に日本人としてダイコク、ナブナ、ノウチ、クワバラの名がみられる。

この年の6月18日や7月3日着の便で、香港からの積荷として大量の砂糖が運ばれてきている。砂糖の輸入は年々増加の一途をたどっているのが、年度毎の「英領事報告」などから知れ、木綿類に次ぐ大きな輸入品目

のひとつであった。

1877年5月26日に香港を出港したメーコン(Meikong 2,800トン)号は、6月17日に西伊豆海岸とならんで「海の難所」とか「船の墓場」と船乗りたちに恐れられていたアデン湾、グァルダフィ岬の南側(東経51.22, 北緯10.26)で遭難した。乗客・乗組員あわせて約260人は英船に全員救助されたが、ガルからパリへ輸出された宝石類、新茶100万ポンドを含め積荷は海の藻となったり、掠奪されたりした。乗船中の郵便取扱人が持ち出せた外交鞆ひとつだけが助かったが、他の荷は全て流出したともいう。<sup>26)</sup>

乗客たちが英船に救助されるまでは、全員が対岸のソマリーランドに避難したが、この折に人道的な問題が起きた。ソマリーランドの兵士や土着民おおよそ500人が救助をするどころか、船から流れてくる積荷や手荷物をわれ先にと奪い去ったのであった。このため、救助にきた英船は接岸もできず、安全な場所を選んで停泊した。しかしながら、乗客・乗組員らはこの英船のところまで、炎天下の岩の砂漠を4時間も歩かざるをえないはめにおちいったのである。50度を越す砂漠の中で、メーコン号の事務長と船客のひとりが絶命した。

同船には横浜から乗船したフランス領事館員のプリション、後に横浜でレストランを開くベキュー夫人らに混じって日本人の「ソーキチ」がいたが、ソーキチなる人物の身元はいまもってわかっていない。かなり異常な海難事故だったので、ここに紹介してみた。

## 1878

1月1日発の便で、陸軍省や海軍省で軍楽を教えたダグロンが賜暇帰国をした。彼はこの6月30日に日本に戻ってきた時は夫人同伴であったので、結婚が目的の一時帰国であったかも知れない。因に、彼はこの時42歳であった。彼の帰国は1883年3月3日であったが、1872年来日の第2次フランス陸軍教師団は彼を最後として全員が日本を去った。

2月12日の便で、鮫島侯、松方正義、文部大書記官・九鬼隆一、手島精一ら大勢の人達がパリ万博のため出国したが、他にヨーロッパの師範制度取調べのため中川元、西村貞、村岡範為馳、平山成信らも同船した。3等船客として21名もの日本人が乗船していただけに、船中日本語がおおいばりであったろう。

5月20日の便で、マリー・オーグスト、マリー・オネジム、カロリーヌの3修道女が来日した。彼女たちは数日横浜に留まっただけで函館に向かい、ここで孤児のための施設「施療院」を建て、教育と福祉に尽くしたが、これが現在の白百合学園の発端となった。

この年のフランス郵船の出港数は26船で、積荷量は43,165トンであったが、その中心は各年度と同様に絹関係が中心であった。同郵船による輸入品目としては、砂糖が大部分を占めている。なお、10月から4月までは火曜日の出港、5月から9月にかけては水曜日の出港との原則はかなり守られている。

## 1879

この年のフランス郵船の出港数は26船で、イギリス郵船と同数だが、積荷は前者は42,732トンであったのに対し、後者は26,952トンであった。

横浜出港時刻は、若干の例外はあったものの、ここ数年間に渡って「日の出」と共に出港するのが常であったが、この年の8月23日のヴォルガ号からは午前9時出港と改められた。この場合でも、乗客は前日の夜に乗船するのには変わりなかった。

2月16日入港のヴォルガ号には、先述したスール・マティルドが乗船していた。彼女はシンガポールのサン・モール会の修道院長でもあったから、実にひんぱんに乗客名簿の中に名があり、横浜とシンガポールを行き来していたことがわかる。

3月15日入港のタナイス号での来日には、ジュスラン(Jules Jouslain)が

いる。彼はこの3月より神戸のフランス領事館の(副)領事として赴任してきたが、翌1880年8月5日より横浜の同国領事となり、1886年までその任にあった。なお、ジュスランは1876年に司法省の法律規則顧問として来日しているので、この年の横浜着は再来日となる。横浜領事時代の明治16年12月26日に、彼は勲四等旭日小綬章を贈與されているが、フランス領事への叙勲としては極めて異例のことで、明治20年以前のフランス領事で叙勲の対象になったのは彼のみであった。

5月17日発のタナイス号で、次の日本人が出国している。K. Kawakami, F. Firao, T. Ishiguro, F. Takaniatsu, Naotsune Sakai, Oke, Shirata. 陸軍関係の人物と思われる。なお、文部省関係の記録には、この日に寺尾壽がパリへ物理学を学ぶため派遣されているようになっているが、寺尾の名前はない。ことによれば、Firaoが寺尾の誤記か。なお、この船にはロンドンに宛て、218,500ドルの通貨が積み込まれた。

5月8日着のヴォルガ号に、Takano, Kukiの日本人の名前がみられる。後者の人物は、1878年2月に文部省よりフランスの学校教育の調査のため派遣されていた九鬼隆一である。九鬼は約1年フランスに滞在したが、この間において「巴里府万国博会議問題」などの報告を文部省に送付していた。前者は高野正誠である。

11月20日出港のヴォルガ号には、森有礼夫妻と2人の子供の他に、次の12名の日本人が乗船した。S. Massawa, Shinnosuke Matsuhara, Ikoutaro Shimidze, Dijiro Schindo, Kinodji Mome, Sasaki, Tanenori Shimata, Titsujiro Nishikawa, Kwanichi Kubota, Ausuke Mori, Buhashiro Yamasaki, Hasajiro Miyakawaである。

森有礼夫妻らは明治17年4月14日に帰国するが、この時の顔ぶれと先の12名は一致しないので、森の従者ばかりではなかったようである。

幸いなことに、これらの日本人名がフル・ネームで掲載されているので、多少の時間をかければ、ある程度まで人物をさぐりだすことができる

だろう。Kinodzi Momeとある人物は、梅謙次郎の兄・梅錦之丞に間違いない。梅錦之丞は医学・眼科を学ぶため文部省よりドイツ・ベルリンに3年間派遣され、明治16年3月に帰国した人物で、留学時24歳であった。弟の謙次郎の方は、後年フランス留学をはたすようになる。梅と同行した清水郁太郎も同じくベルリン留学をし、産婦人科を学んで明治16年1月24日に帰国した。

また、同船には左院や元老院で法律取調などをしたデュ・ブスケ（Du Bousquet）と2人の子供が乗船していた。デュ・ブスケは、明治11年にお雇いを解かれたあとの同年6月1日より在日フランス公使館で、日本語通訳官をしていたが、この2人の子供は日本人女性との間に生まれた子供たちであった。子供たちをフランスで生活させるため、彼は香港まで見送ったが、香港で3日過ごしたあと12月5日横浜着のヴォルガ号でとんぼ返りをしている。なお、11月20日の便には、プーセ（Pousset）の名もみられる。幕末に横浜フランス語学所の教師をし、明治元年12月に開成学校教師を経て兵学寮に雇用されたフェルナン・プーセその人だったと判断される。

12月26日香港を出港し、翌年1月3日に入港したタナイス号には、ナポリより乗船したYoshikaw と Nakanoの2人の日本人、マルセイユから乗船したNorigachi, Utiyama, Nakamairaの3人の日本人がいた。

フランス郵船とは関連がないが、この年の9月2日にスウェーデンの北極航路探検船のウェガ号（Vega, 600トン）がベーリング半島より横浜に入港した。この船は10月11日まで寄港していたが、この間に船長のノルデンショルドは、横浜の内務省衛生局の技丁であった大口正之の協力を得て、和書6千冊を買い求め、故国に持ち帰った。これらの図書は、現在ストックホルムの王立図書館に保存されている。6千冊の和書はいずれも江戸時代のもので、その収集分野は文学、経済、地理、辞書など多岐に渡っている。当時の値段で約5百円であったが、これらの和書が近年やっと整

理されたので、東洋学の研究者に大いに利用されていくことだろう。特に記しておきたい。

1880

この年のフランス郵船の出港数は27船で、積荷は42,640トンだったが、その荷の大半は絹中心だったのはもちろんである。イギリス郵船は38船で、49,689トンの荷であった。

郵船の場合、郵便物の逡送が最も重要な業種のひとつであったが、この年の3月31日限りで横浜に長い間あったフランス郵便局が閉鎖されることになった。これにより、日本局より差し出される郵便物もフランス郵船に積み込まれるようになったが、フランスの郵便切手を貼った横浜差出便は、この年の3月21日出港のヴォルガ号でのものが最後となった。

4月14日発のタナイス号での船客にムーリエ博士と娘がいたが、ムーリエは1864年8月に来日し、横浜で医者をしたあと名古屋洋学校、司法省などで法律やフランス語を教えていたが、明治12年に体調をくずし箱根や熱海で保養したも好転せず帰国することになった。ムーリエ53歳であった。

4月28日のヴォルガ号には、生野銀山の技師長だったムーシェ (E. Mouchet)、鉦師・坑夫のレルム (P. Lerme) とレニヨル (J. Regnault) の3名が乗船した。生野銀山には合計24名のフランス人技師がいたが、彼ら3人の帰国により、生野にはブードゥ (Boudou) ひとりが残るだけになった。なお、生野で生まれたムーシェの子供の戸籍のことで大きな問題が生じたが、この面に関しては拙稿「生野銀山のお雇いフランス人」<sup>27)</sup>の中で触れてある。

5月12日出港のティーブル号は、1876年以降日本に配船されていた郵船だが、この日香港ではなく上海に出航したあと、再び日本に寄港することはなかった。その後、ティーブル号は1881年から1887年にかけてコロ



ンボ・ガル間、1891年から1901年にかけてはサイゴン・シンガポール間で主として活躍していた。

5月14日発のタナイス号では、横須賀造船所の建築長・ジュウエット (E. Jouet)、陸軍省の教師首長・ミュニエ (Munier) 大佐、マイエ (Mailhet) 博士が帰国したが、日本人としては Kawamura Einosuke, Gada Kiyoshi, Ogmura Djun, Muraki Gabi, Okaba Masatoshi, Omano Tomitaro, Tashima Manatchka がフランスに向った。

この年、最後まで残ったフランス陸軍教師団が相い継いで帰国したが、この年の5月2日にミュニエ大佐、シャルヴェ、ガロパン、バレーの各大尉、大尉相当の一等馬医・アング、軍楽教師・ダグロンが天皇の謁見を受け、これに対しミュニエは謝辞を述べている。<sup>28)</sup>

さらに、5月10日には大山巖陸軍大臣が開いた送別会に彼らは招待されたあと、新橋駅まで大山ら大勢の陸軍関係者によって見送られた。ミュニエは5月10日公式に東京を離れたが、彼に対する満期解雇日は5月31日となったものと考えられる。なお、ガロパン、シャルヴェ、バレーの3大尉の帰国は6月25日のことである。

日仏交流史の研究に携わる者にとって見逃せない興味ある作品がある。少し長文に及ぶが紹介しておくことにする。

「それは昭和もはじめ頃だった。パリ第十六区のミュエット公園で遊んでいた私を日本人の子供だと知って、うれしそうに話しかけてきた上品な白ひげの老人がいた。“わしは坊やのお国の東京に住んでいたことがあるんだよ。カモンヤシキにいたんだ……”

それが明治のはじめに日本陸軍の教官をしていたギャロパン將軍という人で、カモンヤシキとは井伊掃部守屋敷、つまり三宅坂の陸軍参謀本部のことだと知ったのはだいぶ後のことだった。」<sup>29)</sup>

文章はガロパンが筆者を可愛がってくれたこと、旭日章を見せてくれたこと、大和魂を説明してくれたこと、乃木、上原、寺内ら將軍の教師だったことを教えてくれ、日本の良さを充分に理解した老將軍だったことを語っている。

この旭日章とは、ガロパンが明治42年9月23日に贈與された勲三等旭日中綬章であったから、さぞや自慢の品だったことだろう。ガロパンに関する調査はこれまで全く手懸けられていないだけに、パリ16区を中心とする戸籍や足取りの追求によって新しい進展がみられるものと考えられる。

先に示した5月14日出発の7人の日本人は、全員を調べ終わっていないのでなんともいえないが、数名の顔ぶれから判断して陸軍省が派遣した軍人だったとみなしてよいだろう。

陸軍省雇いで外山学校で築壁、要塞術を教えたブーゴワン(Bougouin)はこの年の2月9日に帰国したが、6月27日に今度はフランス公使館付武官として再来日した。以後、永い間日本に滞在したが、1905年7月には裁判事件を起こしている。この6月27日の船では、他に東京のフランス公使館付のド・ラペイレール(de Lapayrère)や香港のフランス領事・ド・ロンプレュ(de Longpraye)の名前がみられる。

8月6日発の郵船には、横浜のフランス領事・ピエレ(Henri Pierret)夫妻が乗船していた。彼は一時期香港で代理領事をしたあと、マニラの領事として赴任した。

7月30日にメンザレー号が入港したが、この船はティーブル号に代って再び配船されてきたもので、ロンドンよりの直行便であった。この復路の8月20日の便でアンゴが帰国した。アンゴの帰国により、第2次フランス陸軍派遣団は音楽のダグロンを除き全て日本から去ったことになる。

アンゴは開拓使に雇い入れられて再来日することが報じられたが、<sup>30)</sup> 実際には再来日はしなかった。なお、アンゴが長いこと使用していた家具、銃、猟犬などが8月14日に彼の居留した神田元一橋屋敷で競売にかけられ

ている。この競売は横浜のブルヌ商会の手で行なわれたが、こういったオークションの記録は氏名の原綴りを知るうえで貴重であるばかりでなく、その人の生活環境を知る上で実に有効な資料といえる。

9月6日午前7時に入港したメンザレー号は、8月31日午後2時に香港を出港したので所要日数は5日と17時間となるが、これは異例ともいえるスピードであった。また、12月1日に入港したタナイス号の場合は6日と13時間の所要日数であったが、この季節としては極く短いものであった。

1880年度の運航表をみればわかるように、10月3日横浜を出港したタナイス号の場合、香港まで9日間もかかっていた航海であった。このような所要日数のずれは、なんらかの事故を想定しても間違いない。このタナイス号の例は、10月3日午前8時に出港したが、相模湾の附近で台風のため舵を壊わし、横浜に戻ることを余儀なくされ、10月5日夜になっての再出港であったから2日間の遅延となった。同様のことが10月5日入港の往路のメンザレー号の場合でもいえ、この船も途中烈しい風のため速度を落としての航行であった。

運航表をみながら、なんらかの遅延の理由などを想像できるようになれば、表の利用価値も一層幅広く利用できるはずである。

12月1日のタナイス号で、6代目にあたる在日フランス公使・ド・ロケット（de Roquette）が来日したが、彼は明治15年3月までその任にあった。

この年度の積荷も絹関係が中心であったが、9月15日のメンザレー号には、202函の絹の他に、通貨3函が積み込まれていた。その内の1函は金貨で1万4,700円、残り2函は銀貨で5,700円であった。これらの通貨が香港まで運ばれたものか、なんらかの資金であったのかは解明できていない。

フランス郵船の入・出港数は各年度とも一定しており、この年の出港数も27便で、積荷は40,590トンであった。これに対し、イギリス船の方は、66便の194,886トンという増加をみせた。

3月11日着のヴォルガ号の日本人船客には、Sameshima（妻と子も同伴）、Koyura, Katonu, Esubuchi, Kochiro, Kakimotoがいた。

4月24日発のタナイス号で、横浜フランス郵便局長だったデグロン(Degron)が帰国。彼は1862年に来日した横浜居留地では最も古い人物であった。同船には、横浜でフランスパン屋を開いていたパデル(H. Padel)もみられる。

5月16日着のタナイス号で、マルセイユから乗船したYagisawa, Skino, Triye, Kubotaが帰国。

6月10日着のメンザレー号で、マルセイユから乗船した日本人（らしい人物）は、Shirosé, Chimatsu Sadamu, K. Asano, Y. Asanoであった。

6月24日着のタナイス号で下記の日本人が帰国したが、これらの人達がマルセイユで乗船したのか、それとも香港であったのかは不明。  
Hirayama, Takagawa, Yamaguchi, Sakourai, Hirosawa, Shimidzu, Tagima, Tagima Isaburo, Sasaki, Mihara.

ただし、これらの人物のうち山口半六がフランス留学より戻っているだけに、全員がマルセイユで乗船したとみなしてよいだろう。

山口半六は明治9年に沖野忠雄と向坂兌と共に文部省より派遣された留学生で、留学時22歳であった。

沖野と向坂は、この年の5月16日に帰国したはずであるが、先に示したように5月16日着の乗客名簿に名はない。

11月15日着のヴォルガ号には、Hake, Kinoshita, Nokgnamo, Hodzuinの人達が乗っていたが、3番目の人物は中川の誤植だろうか。後に初代の文部省視学官に就任した中川元が、この船で帰国しているからである。

欧字新聞に掲載される船舶情報では、特に日本人氏名の綴りに誤記がみられることがよくあるだけに、理想的には数紙の欧字新聞との比較や、他の記録での裏付けも必要になるのはもちろんである。

この年、フランス郵船を利用した日本人はかなりの数に昇っているが、これらの日本人がはたしてフランスと関わりがあったのか、またどのような人達であったかの推定もつかないため、その大部分は省略した。

1882

1月21日のヴォルガ号で、ポール・オジェ（Paul Ozier）が帰国した。オジェは明治10年に島津忠義に招かれて来日した鉦山技師で、生野銀山にいたコワニエらと親交のあった人物である。なお、同船には横浜居留地10番で時計・宝石商を手広く商っていたジュール・コロン（Jules Colomb）も同船している。

1月26日入港のタナイス号には、パークス公使と娘、ヘボン博士、シーボルト、それにビゴーが乗船していた。日本人としては若井夫妻の名がみられるが、1878年のパリ万国博に多くの美術品を出品した起立商工社の若井兼三郎夫妻でもあったろうか。

明治12年以降、ドイツ留学生が急激に増えてくるようになるが、この15年もドイツ留学が相次いだ。2月4日発のメンザレー号で、飯島魁（動物学）、榊俣（精神病学）、三浦守治（病理学）、高橋順太郎（薬物学）、都筑馨六（政治学）がドイツに、九里龍作（機械工学）が英国に赴いている。さらに、3月18日の出国には、文部省御用掛の木場貞長と末岡精一が、政治学研究のためにドイツ、オーストリーに3年間特派されている。

2月18日発のタナイス号でアンドレ・コニール（A. Conil）が帰国した。コニールは1867年より15年もの間フランス郵船横浜支店の支配人を勤めた人で、横浜のフランス人社会にあっては先に帰国したデグロンらと共に中心的な人物であった。彼は1878年のパリ万国博の際に日本出品物に大

いに便宜をはかり、さらに日本人官吏に対し割引運賃を適用したことで、この年の3月に勲四等旭日章を贈與された。なお、彼は後に再び来日し、明治36年5月31日に横浜で逝去した。70歳であった。

4月4日着のメンザレー号には、Ota, Osada, Maeda, Takomura, Hachimotoが乗船している。長田、前田など気になる名前だが、十分に把握できていない。

4月15日のヴォルガ号で、フランス公使のド・ロケットが帰国したが、その直前の4月1日に勲一等旭日大綬章を贈與されている。

同じ船にヴィエスト (A. Viest) が乗船したが、彼は第2次陸軍教師団の一員で、明治10年に陸軍省を解傭されたあと帰国せずに、横浜居留地162番で自分の腕を生かして蹄鉄業を開いていた。この日は店を畳んでの息子同伴の帰国であった。

5月28日着のタナイス号の乗客には、鍋島侯とその家族、Kitashima, Nakano, Hiwa, Motsudoira, Tanakaの日本人がいた。

6月18日出港のタナイス号には、有栖川宮一行の乗船がみられ、20名ほどの日本人氏名を名簿から拾いだすことができる。

8月13日発のヴォルガ号には、Miss Otami Kiowara, Miss H. Kiowara, Miss Oyoneという3人の日本女性がいたが、日本女性の出国は極めて珍しいことだけに消息を知りたいものである。

8月27日発のタナイス号で、Torikata夫妻と4人の子供、Tschoso, Naokichi, Wakayama Genkichiが出国している。名前から推定して芸人ではなかったかと思われるが、これが正しければ曲芸師一行だったろう。この頃、欧州へ曲芸、独楽回し、梯子乗りなどで一旗あげようとして渡航した芸人が多くいたからである。別人かもしれないが、鳥瀉小三吉という芸人が1867年欧州に渡り、鳥瀉の芸に魅せられたドイツ娘を妻とし連れて帰国したのが明治9年8月1日のフランス船でであった。この鳥瀉と名簿にあるトリカタとは、はたしてぶつかるのか。

10月28日の出国にはK. 稲垣とK. 若井の名があり，11月11日出港のヴォルガ号で，自由党総理の板垣退助，後藤象二郎，「自由新聞」記者の栗原亮一が渡仏した。板垣らは翌年6月22日に帰国したが，この間パリでヴィクトル・ユゴーを訪ねている。ユゴーの勧めによって，数多くのフランスの政治小説を買い求め，それを手本として自由民権運動の宣伝や正当化に努めたのが明治17・18年のことであった。

この年，郵船の寄港地でひとつの変化があった。1865年以降セイロンの寄港地はポワント・ド・ガルであったが，1882年6月10日付の達によりガルよりコロomboに変更されたことである。<sup>31)</sup> セイロンといえばコロomboが連想されるらしく，特に小説などではコロombo寄港がもっともらしく書かれたものがあるが，コロomboは遠浅で停泊には適さず，フランス郵船の幹線はこの年までコロomboには寄港しなかったのが通例であった。

### 1883

この年，10年ぶりにゴダヴェリー号が再び日本に配船されてきた。5月20日出航の同船で，在日フランス公使・トリクー（A. Tricou），元司法省雇いでフランス公使館の通訳官だったガリー（G. Galy）が帰国した。トリクーの滞日は1年たらずではあったが，それでも明治政府は彼に勲一等旭日章を贈與している。

6月22日着のタナイス号で先述の板垣らが帰国したが，名簿には Saitow, Kiyma Tsuchiki, S. Goto, C. Goto, Kurihara, Itagaki Taisuke とある。

1883年度に日本の港（横浜，長崎，神戸，函館）を出港した各国の船舶は，前年より26隻増えた946隻であったが，その半数以上の589隻が英船で，次でドイツ船の139隻，アメリカ船の92隻と続き，フランス船は32隻でしかなかった。フランス船の場合はその26隻が郵船であったから，貨物船の入・出港は極くわずかでしかなかったことになる。単純に判断して

も、日本の輸出入はイギリスの手で牛耳られていたことがわかる。この点は、在留外国人の数が、この年イギリス人1,094名、アメリカ人478名、ドイツ人269名、フランス人225名となって反映もしている。

輸出の中心は相変わらず絹が中心だが、お茶、石炭、米、乾燥魚もかなりの額に昇っている。絹の輸出高は1882年より351ドルほど減少した18,287ドルで、後者の4品目は合計すると10,000ドルをやや上回る額であった。輸入の中心は木綿関係で、この額が12,600ドル余りだったが、砂糖の4,455ドルと石油の2,456ドルが目につく。

1884

2月16日出航のメンザレー号には、大山巖陸軍大臣をはじめ、陸軍関係の錚々たる一行が乗船した。大山は天皇の親書を携えて、約1年3ヵ月に渡ってヨーロッパ各国を歴訪したが、一行の中に極めて人目を魅く美女がいた。大山巖の新婦人となった山川捨松である。

山川捨松は、明治4年11月に津田梅らと共にアメリカに留学し、彼の地で10年8ヵ月を過ごし、バッサ大学を卒業して明治15年11月20日に津田と帰国した。この時、捨松は23歳、梅は17歳であった。捨松はその後鹿鳴館の華となるが、明治期における評判の美女、陸奥宗光夫人の亮子（もと新橋の名妓・小鈴）とともに話題の女性であったから、この時の出国は大いに騒がれた。なお、同船で井上哲次郎と斯波淳六郎がドイツ留学生として出国した。

4月28日午後7時に入港したゴダヴェリー号は5日と13時間の所要日数だが、これはこの頃の最短記録である。同船で難波正が帰国した。難波は明治13年10月31日に出国し、3年間パリ大学で物理学を学んだ人物である。なお、このゴダヴェリー号は5月30日に横浜港を出航すると、シンガポール・バタビア間に配船されるようになったので、この後では日本への寄港はない。



5月4日発の便で、英国のエジンバラでの万国森林会議に出席のため山林局長の武井守正が出発したが、通訳として高島得三が同伴した。彼は後にガレーと関わりを持つ高島北海である。

5月18日出港のヴォルガ号にスモリック (Smorik) がいるが、石版印刷を教えたスモリックであろうか。この船には、ナガイ、ムライ、マジマ、マエカワ、テジオの日本人が乗船している。7月13日のヴォルガ号で、Y. ノムラ、H. オグラ、Y. タカハシ、コマツバラ、A. マエダ、J. ツルダ、K. ハラダ、G. イシザワ、J. センガ、Y. コマツバラがマルセイユに向ったが、野村靖ら内務省の関係者ででもあったものか。

8月24日発のメンザレー号には12名の日本人が乗船したが、氏名が判明したのは、森林太郎 (鷗外)、宮崎道三郎、片山国嘉、田中正平、穂積八束の5名である。鷗外を除く4名は、いずれも東大の卒業生で文部省よりドイツ留学を赦された者であった。

9月21日に出港したタナイス号の往路に関しては、1884年の運航表では空欄のままになっている。この船は7月下旬に遭難したため、僚船のメンザレー号とヴォルガ号が相次いで捜査・救助のため現場に向かっているが、タナイス号の横浜入港は確認できないままである。

この10月から11月にかけて、フランス郵船の大型船サガリアン号、ペイホー号、イラウァディ号が相次いで入港した。これらの船は幹線航路に配船されていた郵船で、いずれもマルセイユから香港を経由して来日した。また、復路の際にいずれも台湾の基隆に寄港したが、これは当時トンキンに配属されていたフランス海軍兵への物資の補給と郵便物の引き渡し、引き受けと密接な関連があった。この台湾への寄港は翌1885年6月まで続いた。

11月22日のイラウアディ号で、アーネスト・サトーがマルセイユに向ったが、この船の到着は翌年1月2日であった。この時期の横浜からの直行便は、41日ほどの所要日数でマルセイユに入港したから、1870年代と比

較すると10日ほど短縮したことになる。

12月24日着のヴォルガ号で上野景範夫妻，明治13年11月にドイツ留学をした緒方正規が帰国している。

1885

この2月1日マルセイユを出港したメルブールヌ号は新造船で，3月18日に横浜に入港した。この船での日本人帰国者は，T. タナカという人物がいた。なお，この船は処女航海ということで，3月22日と23日には横浜港で一般公開され話題になっている。復路は横浜よりマルセイユまでの直行便で，オノエ，マキムラなる日本人が乗船している。メルブールヌ号は1887年以降1898年にかけて，横浜・マルセイユの幹線を40航海している。この船の入港により，3月6日に先に入港していたタナイス号は4月11日まで出航を遅らせることになった。

4月19日のヴォルガ号で西園寺公望，M. ハセガワ（ホソガワ），S. ウノ，S. ツダ，K. フジシマ，コノエ・アツマロが横浜を後にしている。近衛篤磨，津田仙などが脳裏に浮かぶ。

6月6日にライプチヒ大学を最優秀で卒業した飯島魁が，6月21日には解剖学を学んだ小金井良精がそれぞれ留学先のドイツよりフランス郵船を利用して帰国している。

9月24日のメンザレー号でカミュ・ジローが来日した。彼は明治3年まで滞日し，陸軍大学校などで教師をしており，帰国後は日本名誉領事の任にあった。なお，同船にはナガイ，ムライ，ツマキ，アサダの4人の日本人が乗船している。この9月24日着の便までは，香港より横浜までの直行便で，特殊な場合を除いては途中で寄港することはなかったが，次便の10月9日横浜着のタナイス号より神戸に寄港するようになった。

横浜・神戸間の郵船には英米の船の他に三菱郵船（日本郵船）が定期就航していたが，これにフランス船が加わることになった。それでも，東海

道の鉄道が開通されるまでは、この航路の利用客は非常に多かったので、フランス郵船は充分採算に合うとふんでの神戸寄港であった。因に10月9日発のヴォルガ号には42名の日本人2等船客が乗船していた。

10月26日着の便でタカハシ夫妻が帰国したが、この人物は明治15年2月にベルリン大学やストラスブルグ大学に留学した高橋順太郎である。

12月9日着のヴォルガ号で、在ドイツ公使であった青木周蔵が妻と娘を伴って帰国した。

12月19日のタナイス号で、H. ミヤケ、H. ハマオ、S. アキヅキ、J. ニシ、K. ゴー、H. ナガイ、G. カワモト、K. ウメ、S. ミヤンタ、H. イケダ、K. オーニシ、J. マツムラ、Y. センボンが出国している。名前から数名の留学生を連想させるが、確実なのは梅謙次郎である。梅はリヨン大学で法律学を学ぶため3年間の予定で文部省より派遣されたが、特に成績が優秀でリヨン大学を最高位で卒業したこともあって、明治22年法学博士の学位を受けたあとドイツ留学を赦され、ベルリン大学で1年5ヵ月学んだ。

## 1886

この年、フランス郵船の運航の上では特に変わったことはなく、全便神戸に寄港して横浜・香港間が運航された。1886年度におけるフランス郵船の横浜への入港数は26便であったが、英船は157隻、米船44隻、独船44隻、露船12隻、日本船1,941隻で、依然として輸出入はイギリスの圧倒的優勢が続いた。

2月2日のメンザレー号で海軍省顧問となる造船大技監のE. ベルタンが妻子を伴って来日した。ベルタンは月給1,833円と桁違いの額をもって雇用され、勲一等瑞宝章、勲一等旭日章ともお雇いフランス人としては最も早く贈與された人物である。

3月27日出港のヴォルガ号に1等船客として19名の日本人が乗船した

が、いまだ2名の人物しか解明できていない。

この年の人物往来は、あまり目立った動きはなく、6月5日にウイーン公使の西園寺が帰国した他に、4人がドイツ留学生として出国している。

## 1887

この年、香港・横浜間の航路を廃止し、代ってマルセイユ・香港間の幹線を延長し、横浜まで航路を延ばす大きな変更があった。マルセイユ・横浜間の定期航路の開設は、1886年6月の協定により決定されていた事柄だが、その実施は1887年7月3日マルセイユを出港した船をもって第1便とする。これにより、従来の香港での乗り換えという不便は解消され、約56日ほどで横浜よりマルセイユまで直行できるようになった。これに伴い、大型の新造船が次々に配船されることになった。

郵船の上では、5月14日に香港を出港したメンザレー号が、5月18日に上海沿岸付近で遭難する大事件がある。この面に関する言及は、別の機会に発表できるだろう。

フランス郵船の乗客としては、チャールズ・ワグマン、ニール号で救助されたレオン・ミュラール、パリで日本美術店を経営し美術雑誌「芸術的日本」を刊行したサミエル・ビングらの往来があった。

## 1888

この年度におけるフランス郵船の横浜入港は27便を数えたが、明治20年以降の乗船客はかなりの増加をみせているだけに、とてもすべてをここでは記録できない。

この年度の話題は、9月8日にアヴァ号で帰国した森林太郎（鷗外）であろう。森林太郎はこの3月帰国を命じられ、上司の石黒忠恵陸軍軍医監に随ってベルリンよりパリを経由して、マルセイユより帰国の途についた。

パリ滞在中の7月27日、森林太郎は石黒に対し「情人ブレメンヨリ独乙

船ニテ本邦ニ赴キタリ」との情事にかかわる告白をしている。この「情人」とは、鷗外の『舞姫』のヒロインで、彼の義弟・小金井良精を中心とする森一族の固いガードにあって、ひとり淋しく帰国させられることになったエリーゼ・ヴィーゲルド (Elise Wiegert) であった。

エリーゼは鷗外に4日遅れた9月12日にドイツ船で横浜に入港することになったため、鷗外を追いかけてきたドイツ女性ということに日にちの上ではなるが、現実には鷗外がマルセイユを出航する前の7月25日には既にブレーメンを出発していたことを指摘しておきたい。因に、この当時のブレーメンから横浜までの1等片道料金は450ドルであったから、年給千円の鷗外が捻出できない金額ではなかった。

## 1889

この年度に横浜を出港したフランス国籍の船は27隻で、その積荷高は62,580トンであったが、英船は292隻で、505,457トンであったから、イギリスの圧倒的な優位はなおも続いた。

7月11日にアナディール号がアデン港で僚船のオクサス号と衝突して沈没したため、急遽ヴォルガ号が上海を出航して復路の便にそなえることになった。

乗客としては、ボアソナードが一時帰国したのと、フランス総領事のクルブコブスキーの来日が目につく。

ドイツ留学生だった穂積八束が1月29日に、河本重次郎 (眼科学) がイタリー、スイス、フランスの大学を巡回して5月19日に、横山又次郎 (地質・古生物学) が11月3日の便で帰国した。

## フランス郵船の運賃

日本に最も早く寄港するようになった定期郵船は、イギリスのP. O.

(Peninsula Oriental Steamship Navigation) 所属の船で、1864年のことであった。次で、1865年にフランス郵船、1867年にアメリカの P. M. S. S. (Pacific Mail Steam Ship Company)、1875年にイギリスの O. & O. (Occidental & Oriental Steamship Company) が定期船を横浜に寄港させるようになった。

当初、これらの郵船会社の運賃は、協定していなかったため若干の差はあったが、1870年のフランス郵船の横浜・マルセイユ間の1等料金は550ドルであった。ところが、1871年に入って、ほぼ同じコースをとる P. O. が横浜・ブリンディジ間を455ドルに値下げしたことにより、フランス郵船も値下げを断行せざるをえなくなった。

別表1では1878年の運賃表を掲げたが、この料金は1871年以降ほとんど変わっていないと理解してもらってよい。ただし、横浜・香港間だけは、1860年代が1等料金で150ドルだったものが1875年には119ドル、1878年には80ドルと値下げされている。

P. M. や O. & O. では横浜・香港間、横浜・サンフランシスコ間の往復切符に関しては、20パーセントあるいは25パーセントの割引運賃を取り入れたので、フランス郵船でも同様の処置が適用されたものと思われる。

1880年代になると、東回りでなく、太平洋航路を利用しアメリカ大陸を横断してヨーロッパに至る行程の方が、日数としては若干早く着くようになった。また、東洋航路の危険な季節風にも遇わずにすむこともあって、太平洋航路の利用者は増加していった。

1867年に P. M. が就航したときの横浜・サンフランシスコ間の1等運賃は250ドルで、2等のそれは170ドルであった。しかし、欧州へはパナマ運河を経由したために運賃は非常に高いものにつき、サザンプトンまでは1等で670ドル、2等で441ドルもした。しかし、アメリカ大陸横断鉄道の開通により、この西回り便は値下げされ、1876年時の横浜・サンフランシスコ間の250ドルには変わりはないが、ロンドン、ハンブルグ、パリ

などは430～440ドルと220ドル以上も値下げされることになった。この1等片道料金の440ドルは、東回り、西回りとも同額となり、各郵船会社は食事やワインに気を配っては、この競走に勝ちぬこうとしたのだった。

### 横浜寄港のフランス郵船名

郵船名に関しては、別表2で日本に寄港した年代の古い順に記録しておいたが、最も難しいのはそれぞれの船のトン数である。例えば、デュプレックス号の場合を例にとると、871トンから、970トン、1900トンまでいろいろの記録がある。船によっては、入出港のトン数さえ異なっているので、どの記録が最も正しいのか戸惑う。総トン数、積載トン数、排水トン数、容積トン数、修理後のトン数などで変化が生じるのは当然だが、別表でのトン数は主にパリのフランス郵船会社の古文書と、当該船舶が初めに横浜に寄港した時の記録をもとに作製した。

船長名は各年度の運航表で示しておいたが、これらの大部分は海軍大尉の背書きであった。なお、表の参考欄は、主に日本に寄港した年代を示したものだが、若干の補足説明を以下にしておく。

最初に横浜・上海間に配船されたデュプレックス号は、1862年から1864年にかけては地中海航路に配船されていたが、1865年8月に約4ヵ月を費やしてマルセイユから香港に到着し、この9月から日本に寄港するようになった。1867年と1869年は主に香港・上海間で活躍し、1870年にまた日本に配船されてきた。なお、同船と幕末・明治初年に日本近海にあったフランスの軍用船・デュプレックス号とは同名異船である。

ラ・ブールドンネ号は、1862年から1864年にかけてはエジプト・シリア間に就航し、1864年から1866年にかけて上海・香港間、1868年にはコロombo・ガル間に配船されたあと、1869年と1870年に上海・横浜間に就航した。

アルフェ号は1862年から1866年末にかけスエズ・香港間の幹線航路に主として配属された大型船で、この間10往復を記録した。日本への寄港は1866年末から1867年初めにかけての3度だが、この船を利用すれば上海での乗り換えを必要としなく、香港まで直行できた。なお、同船は1867年9月香港を出航すると、喜望峰を経由してマルセイユに帰港した。

アンペラトリス号は、アルフェ号と同様の大型船で、建造された1860年はマルセイユ・リオ デジャネイロ間に配船されたが、1862年より1866年にかけてスエズ・香港間の幹線航路で10往復を果たした。この船の日本寄港は1868年暮れの1度だけだが、幕末期にフランスに旅をした人であれば、この船か先のアルフェ号を利用するのが常だったので、日本人にはなじみの船だったはずである。渋沢栄一と杉浦愛蔵の『航西日記』の中で、「(アンペラトリス号は) アルヘー船よりは二層也大なる船にて尤清潔な里」と書かれているが、これら2船が配船された航路や船の記録から判断すると、全く同型の船だったと考えるわけにはいかない。

1862年から1867年にかけてスエズ・香港間に就航したフランス郵船は、先の2船の他にカンボージュ (Cambodge) 号、ドナイ (Donnai) 号、ティートル (Tigre) 号の3船があったが、これらの船のトン数は1650～1684トンであった。幹線航路に配船される郵船は、それなりに大きい1400馬力 (500 chevaux nominals) ほどの船である必要があった。これらの大型船が、たまたま小さな港や引き潮の時に入港する際には接岸できないようなこともあった。

ファーズ号は、1867年から1872年にかけ上海・横浜間、あるいは香港・上海間で専ら就航していた船だが、1873年1月に日本政府のウィーン万博出品物を積んで横浜を出港したあと、再び日本に寄港することはなかった。なお、この船のトン数には626, 951, 960, 1190, 1900トンの記録があるが、1872年代の横浜入出港時の記録にある960トンが妥当な線といえそうである。



ヴォルガ号は、1870年より1887年のマルセイユ・横浜間が開通されるまでの間、最も横浜に寄港した長命船である。

ニール2世号とメンザレー号は、1874年と1887年に沈没した不運船。

ペイホー号、アヴァ号、シンディー号は、いずれもラ・シオタで建造された2,400馬力の新造船であった。

次で登場するのが、2,900馬力級のサガリアン号など7船である。この内、ヤンツェ号はデジムナー号をモデルに建造したので全く同じ船体であったが、甲板は後者がチーク材であったものを前者はマホガニー材を使用した。これら7船の内、コンゴ号は1889年から1890年にかけて極く短期間配船されただけだが、他の6船は43回から51回に渡って幹線での大航海を成し遂げている。なお、これらの郵船の全長は115メートルであった。

1887年以降さらに大型の全長126メートル、3,400馬力の郵船が寄港するようになった。カレドニアン号、メルブールヌ号、ナタル号の3船がそれだが、これらの船はそれぞれ40回から46回の大航海をはたした。

1890年代に関しては記録していないが、全長136メートル、7,200馬力、6,300トン級の新造船がマルセイユ・横浜間に就航しだした。

別表2で、Ligne N と Ligne S と記載してあるが、Ligne N とは幹線航路（スエズ・香港間、後にマルセイユ・横浜間）を指し、Ligne Sとは支線の上海・横浜間（後に香港・横浜間）を示す。ガル・カルカッタ間はO航路、シンガポール・バタヴィア間はP航路、香港・上海間はR航路という呼び方をしていた。

本稿にあたって、国立国会図書館、国立公文書館、外務省外交資料館、横浜開港資料館、大佛次郎記念館、東京大学明治新聞雑誌文庫、上智大学図書館、早稲田大学図書館、国際交流基金図書館、東洋文庫、ブリティシ・ライブラリー、パリ外交資料館、メサジュリ・マリティーム社、フランス郵政省、香港大学図書館、カリフォルニア大学図書館蔵の資料を参照

させていただいた。記して謝意を表したい。

## 参考文献

The Japan Herald 1861～1865  
The Daily Japan Herald 1864, 1866～1867  
The Japan Times 1865～1866  
The Japan Times' Daily Advertiser 1865～1866  
The Japan Daily Herald 1874～1881  
The Japan Times' Overland Mail 1868～1869  
The Japan Weekly Mail 1871～1889  
The Japan Gazette 1874～1878  
The Hong-Kong Daily Press 1864～1887  
L' Echo du Japon 1874 ～ 1882, 1884～1885

Japan Herald Directory and Hong List for Yokohama, 1870  
China Directory 1862, 1867  
Chronicle & Directory 1864, 1865, 1866

Archives de la Compagnie des Messageries Maritimes  
Archives du Musée Postal, Paris

R. Salles : La Poste Maritime Francaise, Tome V

- 注 1) 拙稿「フランス郵船」(『横浜フランス物語』に所載。昭和54年)  
2) The Japan Times' Daily Advertiser (1865. 9. 13 号)  
The Japan Times (1865. 9. 22 号)  
3) フランス郵船とは別に、1862年以降日本近海に配属されていたフランス海軍のコルヴェート艦「デュプレックス」号がある。後者は900トン、500馬力、砲20門(記録によっては13砲)の軍用船で、1865年時の艦長はA. コンラッド。1868年に起きた「堺事件」の折の艦長はB. デュ・プティトワールであった。なお、この時の記録では、1800トン、砲10門とある。  
4) The Japan Times' Daily Advertiser (1865. 9. 13 号)  
The Japan Times (1865. 9. 15 号)  
5) The Japan Times (1865. 9. 15 号)  
6) 注1に同じ。  
7) The Japan Times (1865. 10. 20 号)

- The Japan Times' Daily Advertiser (1865. 10. 18 号)
- 8) The Japan Times' Daily Advertiser and Yokohama "Bell" (1866. 4. 24 号)
- 9) The Daily Japan Herald (1866. 10. 17 号)
- 10) 同上 (1866. 11. 19 号)
- 11) 同上 (1867. 1. 17 号)
- 12) 拙稿「横浜・横須賀製鉄所のフランス人技師」(『千葉敬愛経済大学研究論集』第21号)
- 13) The Daily Japan Herald (1867. 5. 30 号)
- 14) The Japan Times' Overland Mail (1868. 1. 18 号)
- 15) 同上 (1868. 8. 8 号)
- 16) 同上 (1868. 9. 5 号)
- 17) 同上 (1868. 6. 26 号)
- 「Le Vice-Amiral Bergasse du Petit - Thouars d'après ses notes et sa correspondance, 1832-1890」 p.p. 312-315
- 18) 「British Consular Trade Report」  
「Summary of Foreign Trade of Japan」  
「British Shipping Report」
- 19) 『澳国博覧会参同記要』(明治30年)
- 20) The Japan Mail (1874. 1. 13, 1874. 2. 24 号)
- 21) 「British Consular Trade Report for the year 1872, 1873」
- 22) 拙稿「フランス郵船ニール号遭難」(『仏蘭西学研究』第9号)
- 23) L' Echo du Japon (1875. 8. 27 号)
- 24) The Japan Weekly Mail (1875. 8. 28 号)
- 25) The Japan Weekly Mail (1877. 11. 24 号)
- 26) L' Echo du Japon (1877. 7. 17, 7. 30 号)
- 27) 拙稿「生野銀山のお雇いフランス人」(『仏蘭西学研究』第11号)
- 28) L' Echo du Japon (1880. 5. 11 号)
- 29) 柳井乃武夫『感覚的パリ案内』昭和39年
- 30) L' Echo du Japon (1880. 9. 15 号)
- 31) 同上 (1882. 6. 13 号)

Ligne Annexe de Shanghai à Yokohama

1	2	3	4	5	6
---	---	---	---	---	---

1865

SH	YO			YO	SH
9.3	9.7	Dupleix	Mélizan	9.12	9.18
10.10	10.15	Dupleix	Mélizan	10.18	10.23
11.7	11.11	Dupleix	Mélizan	11.16	11.21
12.12	12.16	Dupleix	Mélizan	12.20	12.25

1866

1.10	1.14	Dupleix	Mélizan	1.18	1.24
2.6	2.11	Dupleix	Mélizan	2.16	2.23
3.8	3.12	Dupleix	Mélizan	3.16	3.23
4.7	4.12	Dupleix	Mélizan	4.17	4.22
5.4	5.8	Dupleix	Mélizan	5.12	5.17
6.3	6.8	Dupleix	Mélizan	6.12	6.18
(7.5)	7.13	Dupleix	Mélizan	(7.13)	(7.18)
(8.5)	(8.10)	Dupleix	Mélizan	(8.13)	(8.18)
(9.5)	(9.10)	Dupleix	Mélizan	(9.12)	(9.19)
10.9	10.13	La Bourdonnais	Rigodit	10.17	10.22
11.9	11.13	Dupleix	Noël	11.18	11.23
12.9	12.13	Alphée	de l'Escaille	12.17	12.23

1867

1.9	1.13	Alphée	de l'Escaille	1.17	1.21
	2.11	Alphée	de l'Escaille	2.15	2.18
3.8	3.13	Suwonada	Jayne	3.16	3.20
4.9	4.13	Phase	Hinstin	4.17	4.20
5.2	5.9	Phase	Hinstin	5.13	(5.17)
6.5	6.9	Phase	Hinstin	6.13	6.17
7.6	7.10	Phase	Hinstin	7.14	7.17
8.1	8.5	Phase	Hinstin	8.11	8.15
		Phase	Hinstin	(9.12)	(9.15)

- 1: Date de départ de Shanghai 上海出港日  
 2: Date d'arrivé à Yokohama 横浜入港日  
 3: Nom de Paquebot 船名  
 4: Nom de capitaine 船長名  
 5: Date de départ de Yokohama 横浜出港日  
 6: Date d'arrivé à Shanghai 上海入港日  
 ※. SH: Shanghai, YO: Yokohama, HK: Hong Kong,  
 Mars: Marseille

※. 括弧内の月日は予定表による。空欄は未調査。

フランス郵船と日本

1	2	3	4	5	6
SH	YO	Phase Phase Phase	Hinstin Hinstin Hinstin	YO (10.16) (11.16) 12.17	SH (10.19) (11.19) (12.20)

1868

	1.15 (2.16) 3.18 4.11 5.10 6.7 7.5 8.8 9.8 10.12 12.16	Phase Phase Phase Phase Phase Phase Phase Phase Phase Dupleix Phase Impératrice	Hinstin	1.19 2.18 3.20 4.15 5.13 6.12 7.11 8.13 9.13 10.16 (11.14) 12.18	1.22 2.21 3.23 (4.18) 5.17 6.15 7.14 8.17 (9.17) 10.20 (11.18) (12.21)
--	--	--	---------	---	---

1869

	1.13 2.8	Dupleix Dupleix	1.16 2.14	2.17
--	-------------	--------------------	--------------	------

Ligne Annexe de Hong-Kong à Yokohama

HK	YO			YO	HK
	3.13	Dupleix		3.21	3.28
	4.10	Dupleix		4.14	4.22
4.29	5.9	La Bourdonnais		5.12	5.20
	6.4	Dupleix		6.8	6.15
	7.3	Dupleix	Rapatel	7.7	7.16
	7.28	Dupleix	Rapatel	8.3	8.11
	8.25	La Bourdonnais	Rapatel	8.31	9.7
	(9.24)	Dupleix	Champeoir	10.3	10.10
	10.23	La Bourdonnais	Rapatel	11.1	11.9
11.14	11.22	Dupleix	Rousseau	11.28	12.5
	12.20	La Bourdonnais	Rapatel	12.26	1.4

1	2	3	4	5	6
---	---	---	---	---	---

1870

HK	YO			YO	HK
		Dupleix		1.22	1.31
		La Bourdonnais		(2.22)	(3.1)
(3.4)	(3.14)	Dupleix		(3.20)	(3.27)
(4.1)	(4.11)	La Bourdonnais		4.13	4.20
(4.26)	(5.5)	Dupleix		(5.12)	(5.19)
(5.24)	(6.2)	La Bourdonnais		6.7	6.16
(6.21)	(6.30)	La Bourdonnais		7.5	7.11
(7.19)	(7.28)	Volga		8.2	8.11
		La Bourdonnais		(8.16)	(8.24)
(8.16)	(8.25)	Volga		(8.30)	(9.5)
(8.30)	(9.8)	Godavéry		(9.16)	(9.24)
(9.13)	(9.22)	Volga		(10.2)	(10.9)
(9.27)	(10.6)	Godavéry		(10.16)	(10.23)
(10.11)	(10.20)	Volga		10.30	11.6
(10.25)	(11.3)	La Bourdonnais		11.13	11.19
(11.8)	(11.17)	Volga		(11.27)	(12.6)
(12.9)	(12.19)	Godavéry		12.25	1.2

1871

(1.6)	1.17	Godavéry	Lecomtre	1.22	1.29
(2.3)	2.11	Volga	Boubee	2.19	2.25
	3.12	Volga	Bouillon	3.19	3.25
	4.7	Volga	Boubee	4.16	4.23
	5.6	Godavéry	Fouche	5.9	5.15
5.26	6.2	Volga	Boubee	6.6	6.13
	6.29	Volga	Boubee	7.4	7.11
	7.27	Godavéry	Fouche	8.1	8.7
8.16	8.24	Volga	Flambeau	8.29	9.4
8.30	9.5	Godavéry	Foache	9.12	9.18
	9.20	Volga	Flambeau	10.1	10.9
	10.5	Godavéry	Foache	10.16	10.23
10.13	10.23	Volga	Flambeau	10.29	11.5
	11.2	Godavéry	Foache	11.12	11.20
	11.17	Volga	Flambeau	11.26	12.3
11.26	12.4	Godavéry	Foache	12.10	12.16
12.10	12.19	Phase	Such	12.24	12.30
12.22	1.1	Godavéry	Foache	1.9	1.15

1	2	3	4	5	6
---	---	---	---	---	---

1872

HK	YO			YO	HK
	1.13	Volga	Flambeau	1.23	1.29
	2.1	Phase	Such	2.6	2.12
2.4	2.12	Volga	Flambeau	2.20	2.26
	2.26	Godavéry	Foache	3.6	3.13
	3.11	Phase	Such	3.19	3.26
	3.24	Godavéry	Flambeau	4.2	4.10
	4.5	Volga	Flambeau	4.16	4.22
		Phase	Such	4.24	5.2
	5.1	Volga	Frambeau	5.8	5.15
(5.7)	5.17	Godavéry	Vailhen	5.22	5.28
	5.28	Phase	Such	6.5	6.12
6.8	6.17	Godavéry	Vailhen	6.20	6.27
6.19	6.27	Volga	Flambeau	7.3	7.11
7.4	7.10	Godavéry	Veilhen	7.17	7.25
	7.25	Volga	Flambeau	7.31	8.7
	8.14	Godavéry	Vailhen	8.17	8.23
	8.19	Volga	Flambeau	8.28	9.5
8.28	9.5	Godavéry	Vailhen	9.11	9.17
	9.21	Volga	Flambeau	9.26	10.3
9.29	10.10	Godavéry	Vailhen	10.16	10.22
	10.17	Volga	Flambeau	10.29	11.4
10.23	10.31	Phase	Walker	11.12	11.18
	11.19	Menzaleh	Mourrut	11.26	12.4
11.23	12.2	Volga	Flambeau	12.10	12.27
12.7	12.16	Menzaleh	Mourier	12.24	12.31
	12.26	Phase	Walter	注 1	
12.23	12.31	Volga	Flambeau	1.7	1.13

注 1. Phaseは1873. 1. 30 Triesteに向って出航。

1873

HK	YO			YO	HK
	1.11	Menzaleh	Mourrut	1.21	1.28
	1.26	Volga	Flambeau	2.4	2.10
2.2	2.10	Menzaleh	Mourrut	2.18	2.26
	2.22	Volga	Flambeau	3.4	3.10
	3.12	Menzaleh	Mourrut	3.18	3.25
	3.23	Volga	Flambeau	4.1	4.7

1	2	3	4	5	6
HK	YO			YO	HK
	4.5	Menzaleh	Mourrut	4.15	4.22
	4.17	Volga	Flambeau	4.23	4.29
	5.2	Menzaleh	Mourrut	5.7	5.13
5.8	5.15	Volga	Flambeau	5.21	5.30
	5.25	Menzaleh	Mourrut	6.4	6.10
	6.8	Nil	Samat	6.18	6.24
6.5	6.13	Volga	Flambeau	9.10	9.17
	6.23	Menzaleh	Mourrut	7.2	7.9
7.4	7.12	Nil	Samat	7.16	7.24
7.17	7.24	Menzaleh	Mourrut	7.30	8.6
	8.8	Nil	Samat	8.13	8.21
	8.22	Menzaleh	Mourrut	8.27	9.4
8.29	9.7	Nil	Samat	9.25	10.1
	9.19	Menzaleh	Mourrut	10.14	10.21
10.4	10.12	Volga	Flambeau	10.28	11.3
10.9	10.16	Nil	Samat	11.11	11.18
10.24	11.3	Menzaleh	Mourrut	11.25	12.3
	11.15	Volga	Flambeau	12.9	12.16
	11.29	Nil	Samat	12.23	12.30
	12.16	Menzaleh	Mourrut	1.6	1.12
12.22	12.31	Volga	Flambeau	1.20	1.27

1874

1.3	1.11	Nil	Samat	2.3	2.11
1.17	1.25	Menzaleh	Mourrut	4.1	4.7
2.1	2.8	Volga	Flambeau	2.17	2.23
2.16	2.24	Nil	Samat	3.3	3.10
2.28	3.7	Volga	Flambeau	3.18	3.24
3.13	(3.22)	Nil	Samat	---	---
3.28	4.5	Volga	Flambeau	4.15	4.21
4.11	4.19	Menzaleh	Mourrut	4.22	4.29
4.23	5.1	Volga	Flambeau	5.6	5.13
5.8	5.14	Menzaleh	Pasqualini	5.20	5.26
5.19	5.27	Volga	Flambeau	6.3	6.10
6.2	6.9	Menzaleh	Pasqualini	6.17	6.25
6.14	6.21	Volga	Flambeau	7.1	7.9
7.2	7.9	Tanaïs	Reynier	7.15	7.22
---	---	(Nevada)	Coy	7.30	8.6
7.14	7.28	Volga	Nomdedeu	9.23	9.30
7.24	8.4	Tanaïs	Reynier	8.12	8.19



1	2	3	4	5	6
HK	YO			YO	HK
8.12	8.19	Menzaleh	Pasqualini	8.26	9.3
8.25	9.1	Tanaïs	Reynier	9.9	9.16
9.8	9.16	Manzaleh	Pasqualini	10.13	10.20
9.25	10.3	Tanaïs	Reynier	10.27	11.3
10.8	10.17	Volga	Nomdedeu	11.10	11.17
10.23	11.2	Menzaleh	Pasqualini	11.24	11.30
11.8	11.16	Tanaïs	Reynier	12.8	12.14
11.21	11.29	Volga	Nomdedeu	12.22	12.29
12.6	12.13	Menzaleh	Pasqualini	1.5	1.12
12.20	12.27	Tanaïs	Reynier	1.19	1.25

1875

1.4	1.12	Volga	Nondedeu	2.2	2.8
1.19	1.27	Menzaleh	Pasqualini	2.16	2.22
	2.6	Tanaïs	Reynier	3.2	3.9
	2.22	Volga	Nondedeu	3.16	3.23
	3.8	Menzaleh	Pasqualini	3.30	4.6
	3.19	Tanaïs	Reynier	4.13	4.20
	4.2	Volga	Nondedeu	4.21	4.28
	4.15	Menzaleh	Pasqualini	5.5	5.12
	5.1	Tanaïs	Reynier	5.19	5.25
	5.14	Volga	Nondedeu	6.2	6.9
	5.25	Menzaleh	Pasqualini	6.16	6.24
	6.10	Tanaïs	Reynier	6.30	7.7
	6.20	Volga	Nondedeu	7.14	7.21
	7.7	Menzaleh	Pasqualini	7.28	8.4
	7.19	Tanaïs	Reynier	8.11	8.19
7.26	8.1	Volga	Nondedeu	8.25	9.2
8.10	8.17	Menzaleh	Pasqualini	9.8	9.16
8.25	9.1	Tanaïs	Reynier	9.22	9.30
	9.14	Volga	Nondedeu	10.12	10.19
9.22	9.30	Menzaleh	Pasqualini	10.26	11.2
10.5	10.12	Tanaïs	Reynier	11.9	11.15
10.23	10.30	Volga	Nondedeu	11.23	11.30
11.8	11.16	Menzaleh	Pasqualini	11.26	12.3
11.20	11.28	Tanaïs	Reynier	12.7	12.14
12.4	12.11	Volga	Nondedeu	12.21	12.28
12.11	12.16	Tanaïs	Reynier	1.4	1.11
12.30	1.6	Menzaleh	Pasqualini	1.18	1.24

1	2	3	4	5	6
---	---	---	---	---	---

1876

HK	YO			YO	HK
1.1	1.11	Volga	Nondedeu	2.1	2.7
1.17	1.25	Tanaïs	Reynier	2.15	2.23
1.31	2.8	Menzaleh	Pasqualini	2.29	3.8
2.11	2.22	Volga	Nondedeu	3.28	4.4
2.28	3.6	Tanaïs	Reynier	3.14	3.20
3.11	3.18	Menzaleh	Pasqualini	4.11	4.18
3.25	4.3	Tanaïs	Reynier	5.3	5.9
4.7	4.14	Volga	Nondedeu	4.19	4.26
4.20	4.27	Menzaleh	Pasqualini	5.17	5.23
5.3	5.10	Tibre	Girard	5.31	6.6
5.16	5.23	Tanaïs	Reynier	6.14	6.20
5.31	6.6	Menzaleh	Pasqualini	6.28	7.4
6.14	6.21	Tibre	Girard	7.12	7.19
6.30	7.6	Tanaïs	Reynier	7.26	8.3
	7.20	Menzaleh	Pasqualini	8.9	8.15
	8.1	Tibre	Girard	8.23	8.30
8.6	8.14	Tanaïs	Reynier	9.6	9.13
8.23	8.30	Menzaleh	Pasqualini	9.20	9.26
9.4	9.10	Tibre	Girard	10.10	10.16
9.16	9.27	Tanaïs	Reynier	10.24	10.31
10.6	10.14	Menzaleh	Pasqualini	11.7	11.15
10.19	10.26	Tibre	Girard	11.21	11.27
	11.10	Tanaïs	Reynier	12.5	12.11
11.17	11.25	Menzaleh	Pasqualini	12.19	12.25
12.4	12.10	Tibre	Girard	1.3	1.9
12.16	12.23	Tanaïs	Reynier	1.16	1.22
12.31	1.6	Menzaleh	Pasqualini	1.30	2.5

1877

1.13	1.20	Tibre	Girard	2.13	2.20
1.27	2.2	Tanaïs	Reynier	2.27	3.5
2.11	2.19	Menzaleh	Pasqualini	3.13	3.19
2.22	3.3	Tibre	Girard	3.27	4.3
	3.16	Tanaïs	Reynier	4.10	4.16
3.23	3.31	Menzaleh	Pasqualini	4.18	4.24
	4.12	Tibre	De Girard	5.2	5.9
4.20	4.27	Tanaïs	Reynier	5.16	5.22

1	2	3	4	5	6
HK	YO			YO	HK
5.3	5.10	Menzaleh	Pasqualini	6.1	注 1
5.14	5.21	Tibre	Girard	5.30	6.7
5.24	5.31	Volga	Rolland	6.13	6.20
	6.6	Tanaïs	Reynier	6.27	7.3
6.11	6.18	Tibre	Girard	7.11	7.18
6.23	7.3	Volga	Rolland	7.25	8.2
7.10	7.16	Tanaïs	Reynier	8.22	8.28
7.23	7.29	Tibre	Girard	8.8	8.14
8.9	8.16	Volga	Rolland	9.5	(9.15)
8.23	8.29	Tibre	Girard	9.19	(9.26)
9.5	9.11	Tanaïs	De la Marcelle	10.9	10.18
9.20	9.27	Volga	Rolland	10.23	10.30
10.2	10.10	Tibre	Girard	11.6	11.12
10.21	10.28	Tanaïs	De la Marcelle	11.20	11.26
(11.2)	11.10	Volga	Rolland	12.4	12.11
11.16	11.25	Tibre	Girard	12.18	12.24
12.2	12.9	Tanaïs	De la Marcelle	1.1	1.7
12.15	12.22	Volga	Rolland	1.15	1.21

注 1. Menzaleh は Shanghai へ出航。

1878

1.1	1.9	Tibre	Girard	1.29	2.4
1.11	1.19	Tanaïs	De la Marcelle	2.12	2.18
1.29	2.6	Volga	Rolland	2.26	3.5
2.7	2.14	Tibre	Girard	3.12	3.18
2.22	3.1	Tanaïs	De la Marcelle	3.26	4.2
3.7	3.15	Volga	Rolland	4.9	4.16
3.21	3.28	Tibre	Girard	4.17	4.23
4.5	4.12	Tanaïs	De la Marcelle	5.1	5.7
4.18	4.25	Volga	Rolland	5.15	5.21
5.4	5.11	Tibre	Girard	5.29	6.4
5.13	5.20	Tanaïs	De la Marcelle	6.12	6.19
5.31	6.7	Volga	Rolland	6.26	7.3
6.10	6.17	Tibre	Girard	7.10	7.18
6.25	6.30	Tanaïs	De la Marcelle	7.24	7.31
7.8	7.14	Volga	Rolland	8.7	8.14
7.22	7.29	Tibre	Girard	8.21	8.28
8.6	8.12	Tanaïs	De la Marcelle	9.4	9.10
8.18	8.24	Volga	Rolland	9.18	9.25

1	2	3	4	5	6
HK	YO			YO	HK
9.2	9.9	Tibre	Girard	10.8	10.15
9.19	9.25	Tanaïs	De la Marcelle	10.21	10.29
10.1	10.8	Volga	Rolland	11.5	11.11
10.17	10.24	Tibre	Girard	11.19	11.25
11.1	11.9	Tanaïs	De la Marcelle	12.3	12.9
11.17	11.24	Volga	Rolland	12.19	12.26
11.29	12.7	Tibre	Girard	1.1	1.7
(12.14)	12.23	Tanaïs	De la Marcelle	1.16	1.23
(12.28)	1.5	Volga	Rolland	1.30	2.6

1879

(1.17)	1.23	Tibre	Girard	2.12	2.19
1.26	2.2	Tanaïs	De la Marcelle	2.27	3.5
(2.9)	2.16	Volga	Rolland	3.13	(3.20)
(2.22)	2.28	Tibre	Le Pontois	3.27	4.3
3.8	3.15	Tanaïs	De la Marcelle	4.10	4.16
3.22	3.29	Volga	Rolland	4.19	4.25
4.4	4.11	Tibre	Le Pontois	5.3	(5.11)
4.18	4.25	Tanaïs	De la Marcelle	5.17	5.24
5.1	5.8	Volga	Rolland	5.31	6.6
5.17	5.23	Tibre	Le Pontois	6.14	6.21
5.29	6.5	Tanaïs	De la Marcelle	6.28	7.4
6.12	6.19	Volga	Guirand	7.12	7.19
6.26	7.2	Tibre	Reynier	7.26	8.1
7.9	7.15	Tanaïs	De la Marcelle	8.9	8.16
7.23	7.29	Volga	Guirand	8.23	8.29
8.6	8.13	Tibre	Reynier	9.6	9.12
8.20	8.28	Tanaïs	De la Marcelle	9.20	9.27
9.3	9.10	Volga	Guirand	10.9	10.16
(9.17)	9.27	Tibre	Reynier	10.23	10.29
10.1	10.8	Tanaïs	De la Marcelle	11.6	11.12
10.18	10.25	Volga	Guirand	11.20	11.26
(11.1)	11.10	Tibre	Reynier	12.4	12.12
11.15	11.22	Tanaïs	De la Marcelle	12.15	12.21
(11.29)	12.5	Volga	Guirand	12.29	1.4
12.13	12.20	Tibre	Reynier	1.12	1.18
12.26	1.3	Tanaïs	De la Marcelle	1.26	2.2

1	2	3	4	5	6
---	---	---	---	---	---

1880

HK	YO			YO	HK
1.9	1.18	Volga	Guirand	2.9	2.15
	1.31	Tibre	Reynier	2.23	2.29
2.4	2.12	Tanaïs	De la Marcelle	3.7	3.13
2.19	2.26	Volga	Guirand	3.21	3.27
	3.13	Tibre	Reynier	4.4	4.11
3.17	3.28	Tanaïs	De la Marcelle	4.14	4.21
	4.8	Volga	Guirand	4.28	5.5
4.15	4.22	Tibre	Reynier	5.12	注 1
4.26	5.2	Tanaïs	De la Marcelle	5.14	5.20
5.11	5.18	Volga	Guirand	5.28	6.4
5.25	5.31	Tanaïs	De la Marcelle	6.11	6.17
	6.14	Volga	Guirand	6.25	7.2
6.21	6.27	Tanaïs	Reynier	7.9	7.15
7.6	7.12	Volga	Guirand	7.23	7.29
7.19	7.26	Tanaïs	Reynier	8.6	8.13
注 2	7.30	Menzaleh	Homery	8.20	8.27
8.4	8.11	Volga	Guirand	9.3	9.10
8.16	8.24	Tanaïs	Reynier	10.3	10.12
8.31	9.6	Menzaleh	Homery	9.15	9.21
	9.21	Volga	Guirand	10.17	10.23
9.26	10.5	Menzaleh	Homery	10.31	11.8
	10.20	Tanaïs	Reynier	11.14	11.20
	11.5	Volga	Guirand	11.28	12.5
	11.18	Menzaleh	Homery	12.12	12.19
11.24	12.1	Tanaïs	Reynier	12.26	1.1
	12.16	Volga	Guirand	1.9	1.16
	1.2	Menzaleh	Homery	1.23	1.31

注 1. TibreはHong Kongへ向け出航。

注 2. MenzalehはLondonより直行し、Tibreに代って配船された。

1881

	1.12	Tanaïs	Reynier	2.5	2.12
1.12	1.28	Volga	Guirand	2.19	2.26
	2.10	Menzaleh	Homery	3.5	3.11
2.15	2.22	Tanaïs	Reynier	3.19	3.25
3.3	3.11	Volga	Guirand	4.2	4.9
(3.14)	3.22	Menzaleh	Homery	4.16	4.22

1	2	3	4	5	6
HK	YO			YO	HK
	4.4	Tanaïs	Reynier	4.24	5.3
4.11	4.19	Volga	Guirand	5.8	5.15
4.25	5.1	Menzaleh	Homery	5.22	5.28
5.9	5.16	Tanaïs	Reynier	6.5	6.12
5.22	5.28	Volga	Guirand	6.19	6.25
	6.10	Menzaleh	Homery	7.3	7.10
	6.24	Tanaïs	Reynier	7.17	7.24
	7.9	Volga	Guirand	7.31	8.8
	7.22	Menzaleh	Homery	8.14	8.21
	8.4	Tanaïs	Drujon	8.28	9.4
	8.20	Volga	Guirand	9.11	9.19
	9.2	Menzaleh	Homery	9.25	10.1
	9.18	Tanaïs	Drujon	10.15	10.22
	10.2	Volga	Guirand	10.29	11.4
	10.15	Menzaleh	Homery	11.12	11.18
10.27	11.3	Tanaïs	Drujon	11.26	12.2
	11.15	Volga	Guirand	12.10	12.17
	11.30	Menzaleh	Homery	12.24	12.30
	12.14	Tanaïs	Drujon	1.7	1.14
	1.2	Volga	Guirand	1.21	1.28

1882

1.5	1.13	Menzaleh	Homery	2.4	2.10
(1.18)	1.26	Tanaïs	Drujon	2.18	2.24
1.31	2.8	Volga	Guirand	3.4	3.10
(2.12)	2.20	Menzaleh	Guirand	3.18	3.26
2.28	3.8	Tanaïs	Drujon	4.1	4.8
(3.12)	3.20	Volga	Guirand	4.15	4.21
3.28	4.4	Menzaleh	Homery	4.23	4.30
4.11	4.18	Tanaïs	Drujon	5.7	5.13
4.26	5.1	Volga	Guirand	5.21	5.27
	5.13	Menzaleh	Homery	6.4	6.10
5.22	5.28	Tanaïs	Drujon	6.18	6.25
	6.10	Volga	Guirand	7.2	7.9
6.17	6.23	Menzaleh	Homery	7.16	7.23
6.30	7.6	Tanaïs	Drujon	7.30	8.6
7.13	7.20	Volga	du Temple	8.13	8.20
7.29	8.7	Menzaleh	Homery	9.10	9.17
	8.19	Tanaïs	Drujon	8.27	9.3

1	2	3	4	5	6
HK	YO			YO	HK
	9.1	Volga	du Temple	9.24	10.2
	9.19	Tanaïs	Drujon	10.14	10.20
	10.5	Menzaleh	Homery	10.28	11.3
10.10	10.17	Volga	du Temple	11.11	11.17
10.23	10.30	Tanaïs	Drujon	11.25	12.1
11.7	11.17	Menzaleh	Homery	12.9	12.15
12.5	12.12	Tanaïs	Drujon	12.23	12.29
12.15	12.24	Volga	du Temple	1.20	1.26
12.19	12.28	Menzaleh	Homery	1.6	1.12

1883

1.3	1.11	Tanaïs	Drujon	2.3	2.9
1.17	1.24	Menzaleh	Homery	2.17	2.23
1.30	2.6	Volga	Du Temple	3.3	3.9
2.14	2.21	Tanaïs	Drujon	3.17	3.24
3.1	3.6	Menzaleh	Homery	3.31	4.7
3.13	3.20	Godavéry	du Temple	4.13	4.21
3.27	4.3	Tanaïs	Drujon	4.22	4.28
4.10	4.16	Menzaleh	Homery	5.6	5.13
4.23	4.30	Godavéry	du Temple	5.20	5.27
5.6	5.13	Tanaïs	Drujon	6.3	6.9
5.20	5.27	Menzaleh	Homery	6.17	6.23
6.3	6.9	Godavéry	du Temple	7.1	7.7
6.16	6.22	Tanaïs	Drujon	7.15	7.21
7.1	7.7	Menzaleh	B. Blanc	7.29	8.4
7.14	7.20	Godavéry	du Temple	8.12	8.18
7.28	8.3	Tanaïs	Vaquier	8.26	9.1
8.11	8.17	Menzaleh	Blanc	9.9	9.16
8.25	8.31	Godavéry	du Temple	9.23	9.29
9.12	9.19	Tanaïs	Vaquier	10.13	10.20
9.22	9.29	Menzaleh	Blanc	10.27	11.3
10.7	10.15	Godavéry	du Temple	注 1	
10.23	11.1	Tanaïs	Vaquier	11.10	11.16
11.7	11.12	Menzaleh	Blanc	11.24	11.30
11.19	11.28	Tanaïs	Vaquier	12.8	12.15
12.3	12.10	Menzaleh	Blanc	12.22	12.30
12.19	12.25	Volga	Benois	1.5	1.11

注 1. Godavéryは1884. 4. 12 Hong Kongへ向け出航。

1	2	3	4	5	6
---	---	---	---	---	---

1884

HK	YO			YO	HK
1.3	1.9	Menzaleh	Blanc	1.19	1.25
1.16	1.23	Volga	Benois	2.2	2.8
1.31	2.7	Menzaleh	Blanc	2.16	2.22
2.13	2.19	Volga	Benois	3.1	3.7
2.28	3.7	Menzaleh	Blanc	3.15	3.21
3.11	3.17	Volga	du Temple	3.29	4.4
		Godavéry	E. Vannier	4.12	4.18
3.26	4.2	Menzaleh	Blanc	5.4	5.10
4.8	4.14	Volga	du Temple	4.20	4.26
4.23	4.28	Godavéry	Vannier	5.30	(6.8)
5.6	5.12	Volga	du Temple	5.18	5.24
5.20	5.26	Menzaleh	Blanc	6.1	6.8
5.31	6.6	Volga	du Temple	6.15	6.21
6.15	6.21	Menzaleh	Blanc	6.29	7.6
6.28	7.4	Volga	Lafont	7.13	7.20
7.11	7.17	Menzaleh	Benois	7.28	8.3
7.24	7.30	Volga	Lafont	8.10	8.18
8.7	8.14	Menzaleh	Benois	8.24	8.31
8.24	8.30	Volga	Lafont	9.7	9.13
		Tanaïs	A. Paul	9.21	9.27
9.10	9.17	Menzaleh	Benois	10.11	10.17
9.21	9.27	Volga	Lafont	12.6	12.12
10.5	10.10	Saghalien	J. Homery	10.25	10.30
10.19	10.25	Pei-Ho	Bretel	11.8	11.14
11.2	11.8	Iraouaddy	H. Macé	11.22	11.28
11.17	11.27	Menzaleh	Benois	12.20	12.27
12.1	12.11	Tanaïs	A. Paul	1.3	1.10
12.17	12.24	Volga	Lafont	1.17	1.24
12.31	1.7	Menzaleh	Benois	1.31	2.6

1885

1.12	1.20	Tanaïs	A. Paul	2.14	2.21
1.29	2.6	Volga	du Temple	2.28	3.7
2.14	2.22	Menzaleh	C. Benois	3.13	3.21
2.27	3.6	Tanaïs	Paul	4.11	4.18
3.12	3.18	Melbourne	R. Minier	3.28	4.3
3.25	4.3	Volga	du Temple	4.19	4.26
4.8	4.16	Menzaleh	Benois	5.3	5.10



1	2	3	4	5	6
HK	YO			YO	HK
4.22	4.30	Tanaïs	Paul	5.17	5.24
5.6	5.13	Volga	du Temple	5.31	6.6
5.19	5.26	Menzaleh	Benois	6.14	6.22
5.30	6.6	Tanaïs	Paul	6.28	7.7
6.15	6.21	Volga	du Temple	7.12	7.18
6.27	7.4	Menzaleh	Benois	7.27	8.2
7.21	7.28	Tanaïs	Paul	8.9	8.15
7.26	8.1	Volga	du Temple	8.23	8.30
8.7	8.13	Menzaleh	Benois	9.6	9.12
8.21	8.28	Tanaïs	Paul	9.20	9.26
(9.7)	(9.13)	Volga	du Temple	10.9	10.16
9.18	9.24	Menzaleh	Benois	10.23	10.31
10.1	10.9	Tanaïs	Paul	11.7	11.14
10.18	10.26	Volga	du Temple	11.21	11.28
11.1	11.9	Menzaleh	Benois	12.5	12.12
11.17	11.25	Tanaïs	Paul	12.19	12.26
12.1	12.9	Volga	du Temple	1.2	1.9
12.15	12.22	Menzaleh	Benois	1.16	1.23
12.29	1.6	Tanaïs	Paul	1.30	2.7

1886

1.12	1.19	Volga	du Temple	2.13	2.20
1.25	2.2	Menzaleh	Benois	2.27	3.6
2.9	2.16	Tanaïs	Paul	3.13	3.20
2.23	3.2	Volga	du Temple	3.27	4.3
3.9	3.16	Menzaleh	Benois	4.10	4.17
3.23	3.30	Tanaïs	Paul	4.18	4.25
4.6	4.13	Volga	du Temple	5.2	5.10
4.19	4.27	Menzaleh	Benois	5.16	5.24
5.3	5.10	Tanaïs	Paul	5.30	6.6
5.16	5.24	Volga	du Temple	6.13	6.20
5.25	6.5	Menzaleh	Benois	6.27	7.5
6.10	6.17	Tanaïs	Paul	7.11	7.19
6.25	7.2	Volga	du Temple	7.25	8.1
7.10	7.17	Menzaleh	Benois	8.8	8.17
7.25	7.31	Tanaïs	Paul	8.21	8.29
8.7	8.14	Volga	du Temple	9.5	9.12
8.19	8.26	Menzaleh	Benois	9.19	9.26
9.7	9.14	Tanaïs	Paul	10.9	10.16
9.16	9.25	Volga	du Temple	10.23	10.30

1	2	3	4	5	6
HK	YO			YO	HK
10.1	10.8	Menzaleh	Benois	11.6	11.13
10.18	10.25	Tanaïs	Paul	11.20	11.27
11.2	11.9	Volga	du Temple	12.4	12.11
11.19	11.24	Menzaleh	Benois	12.18	12.25
11.30	12.8	Tanaïs	Paul	1.1	1.8
12.15	12.22	Volga	du Temple	1.29	2.5
12.28	1.4	Menzaleh	Benois	1.15	1.22

1887

1.10	1.17	Tanaïs	Paul	1.29	2.5
1.27	2.3	Menzaleh	Benois	2.12	2.19
2.8	2.15	Tanaïs	Paul	2.26	3.5
2.23	3.2	Menzaleh	Benois	3.12	3.19
3.7	3.15	Tanaïs	Paul	3.26	4.2
3.21	3.28	Menzaleh	Benois	4.9	4.17
4.5	4.11	Tanaïs	Paul	4.17	4.24
4.19	4.27	Menzaleh	Blanc	5.1	5.8
5.2	5.9	Tanaïs	Paul	5.15	5.22
5.14	注 1	Menzaleh		---	---
5.26	6.2	Tanaïs	Paul	6.12	6.19
6.11	6.18	Volga	Rivière	6.26	7.4
6.23	6.30	Tanaïs	Paul	7.10	7.17
7.9	7.16	Volga	Bevilagua	7.24	8.1
7.23	7.31	Tanaïs	Paul	8.7	8.14

Grande Ligne de Marseille à Yokohama

Mars	YO			YO	Mars
7.3	8.14	Djemnah	Vaquier	8.22	(10.19)
7.17	8.28	Yangtsé	Bonnefoy	9.5	(10.31)
7.31	9.11	Saghalien	Homery	9.18	(11.19)
8.14	9.25	Anadyr	Delacroix	10.8	(12.1)
8.28	10.10	Iraouaddy	Bretel	10.22	(12.17)
9.11	10.23	Natal	Such	11.5	(12.30)
9.25	11.8	Oxus	Guiraud	11.19	(1.13)
10.9	11.23	Melbourne	Laquerré	12.3	( 1.27)
10.23	12.5	Ava	Vimont	12.17	( 2.10)
11.6	12.26	Djemnah	Vaquier	1.1	( 2.24)
11.20	1.4	Sindh	Macé	1.15	( 3.9)

1	2	3	4	5	6
Mars 12.4 12.18	YO 1.18 1.31	Yangtsé Saghalien	Lormier Fiaschi	YO 1.29 2.12	Mars (3.24) (4.7)

注1. Menzalehは5/21到着予定なれど、途中で遭難。

1888

1.1	2.13	Anadyr	Delacroix	2.26	(4.21)
1.14	2.28	Iraouaddy	Bretel	3.11	(5.5)
1.28	3.11	Natal	Such	3.25	(5.17)
2.11	3.28	Oxus	Guirand	4.8	(5.28)
2.25	4.9	Merbourne	Laquerré	4.15	(6.11)
3.10	4.22	Ava	Vimont	4.29	(6.24)
3.24	5.7	Djemnah	Vaquier	5.13	(7.10)
4.7	5.19	Sindh	Macé	5.27	(7.22)
4.21	6.2	Yangtsé	Lormier	6.11	(8.7)
5.5	6.16	Saghalien	Homery	6.24	(8.26)
5.19	6.29	Anadyr	Delacroix	7.8	(9.2)
6.2	7.13	Iraouaddy	Bretel	7.22	(9.15)
6.16	7.27	Natal	Such	8.5	(9.30)
6.30	8.11	Oxus	Guirand	8.19	(10.12)
7.14	8.25	Merbourne	Bonnefoy	9.2	(10.26)
7.28	9.8	Ava	De Faucon	9.16	(11.15)
8.11	9.20	Djemnah	Vaquier	10.7	(11.28)
8.25	10.6	Yangtsé	Lormier	10.21	(12.12)
9.8	10.19	Saghalien	Homery	11.4	(12.18)
9.22	11.4	Anadyr	Delacroix	11.18	(1.9)
10.6	11.18	Iraouaddy	Bretel	12.2	(1.25)
10.20	12.2	Calédonien	H. de Maubeuge	12.16	(2.7)
11.3	12.16	Natal	Such	12.30	(2.23)
11.17	12.31	Oxus	Guirand	1.13	3.7
12.1	1.12	Merbourne	Vimont	1.27	3.20
12.15	1.29	Ava	Bonnefoy	2.10	4.5
12.29	2.11	Djemnah	Charvay	2.24	4.17

1889

1.13	2.25	Yangtsé	Flandin	3.10	5.2
1.27	3.10	Saghalien	Homery	3.24	5.16
2.10	3.23	Anadyr	Delacroix	4.7	5.23
2.24	4.8	Iraouaddy	Bretel	4.14	6.8
3.10	4.21	Calédonien	de Maubeuge	4.28	6.24
3.24	5.3	Natal	Fiaschi	5.12	7.7

1	2	3	4	5	6
Mars	YO			YO	Mars
4.7	5.19	Oxus	Guiraud	5.26	7.22
4.21	5.31	Merbourne	Vimont	6.9	8.3
5.5	6.14	Ava	Bonnefoy	6.23	8.17
5.19	6.28	Djemnah	Vaquier	7.7	9.1
6.2	7.12	Yangtsé	Flandin	7.21	9.15
6.16	7.26	Saghalien	Homery	8.4	9.30
6.30	注 1	Anadyr		---	---
---	---	Volga		注 2	10.21
7.14	8.24	Iraouaddy	Paul	9.1	10.25
7.28	9.7	Calédonien	de Maubeuge	9.15	11.14
8.11	9.20	Natal	Such	10.6	12.1
8.25	10.4	Oxus	Delacroix	10.20	12.11
9.8	10.19	Merbourne	De Faucon	11.3	12.25
9.22	11.3	Djemnah	Bonnefoy	11.17	1.10
10.6	11.18	Congo	Vaquier	12.1	1.22
10.20	12.3	Yangtsé	Lormier	12.16	2.6
11.3	12.5	Saghalien	Homery	12.29	2.21
11.17	12.31	Iraouaddy	Bretel	1.12	3.6
12.1	1.12	Calédonien	de Maubeuge	1.26	3.19
12.15	1.26	Natal	A. Such	2.10	4.2
12.29	2.10	Oxus	Delacroix	2.23	4.16

注 1. Anadyr は 1889. 7. 11 に Aden で沈没。

注 2. Volga は 1889. 9. 8 に Shanghai より出航。

別表1 フランス郵船運賃表 (1878)

Tarif des prix de passage (1878)

de Yokohama	1er cls	2e cls	3e cls
à Hong Kong	\$80 ( 68)	\$65 (55)	\$45 (38)
Saigon	190 (161)	143 (121)	85 (72)
Singapore	236 (200)	177 (150)	107 (91)
Batavia	297 (252)	223 (189)	134 (114)
Galles	246 (209)	185 (157)	110 (93)
Madras	274 (233)	206 (175)	123 (104)
Calcutta	311 (264)	234 (199)	140 (119)
Aden	263 (223)	197 (167)	119 (101)
Suez	394 (335)	296 (251)	177 (150)
Ismalia	403 (342)	302 (257)	182 (155)
Port-Saïd	412 (350)	310 (263)	185 (157)
Naple	440 (374)	330 (280)	199 (169)
Marseille }			

注. 数字はいずれも(メキシコ)ドル。普通定額料金。括弧内の数字は、日本官員に対する割引料金。

別表 2 横浜寄港のフランス郵船名

Noms de Paquebots de la Ligne S et de la Ligne N

1	2	3	4	5	6
Dupleix	871 (1900)	750	la Ciotat	1862	1865 ~ 1866
La Bourdonnais	944 (1900)	825	la Seyne	1862	1865 ~ 1870
Alphée	1551 (1900)	1075	la Ciotat	1861	1866 ~ 1867
Impératrice	1500 (1551)	1400	la Ciotat	1860	1868
Phase	626 (1900)	1000	la Ciotat	1856	1867 ~ 1872
Volga	951 (960)	750	la Ciotat	1864	1870 ~ 1887
Godavéry	845 (907)	750	Armand	1863	1870 ~ 1884
Menzaleh	1008 (1273)	750	la Seyne	1864	1872 ~ 1887
Nil (II)	1008 (1040)	750	la Seyne	1864	1873 ~ 1874
Tanaïs	983 (1010)	750	la Ciotat	1867	1874 ~ 1887
Tibre	983 (1010)	750	la Ciotat	1866	1876 ~ 1880
Saghalien	2580 (4100)	2900	la Ciotat		1884 ~ 1897
Pei-Ho	1900 (2075)	2400	la Ciotat		1884 ~ 1885
Calédonien	2500 (4200)	3400	la Ciotat		1888 ~ 1910
Iraouaddy	2000 (3613)	2900	la Ciotat		1884 ~ 1890
Merbourne	3400 (4100)	3400	la Ciotat		1885 ~ 1898
Anadyr	2200 (2489)	2900	la Ciotat		1887 ~ 1889
Natal	4038 (4100)	3400	la Ciotat		1887 ~ 1901
Oxus	2390 (4200)	2900	la Ciotat	1879	1887 ~ 1895
Ava	1900 (3129)	2400	la Ciotat		1887 ~ 1889
Djemnah	2200 (3767)	2900	la Ciotat		1887 ~ 1891
Sindh	1990 (2106)	2400	la Ciotat		1887 ~ 1888
Yangtsé	2371 (2400)	2900	la Ciotat		1887 ~ 1892
Congo	2019 (2021)	2900	la Ciotat		1889

- 1: Nom de paquebot  
 2: Jauge brute  
 3: Cheval-vapeur  
 4: Place de construction d'un paquebot  
 5: Date de construction  
 6: N. B.

郵船名  
 総トン数  
 馬力  
 造船地  
 造船年  
 参考